

---

東方黒切札 ~ the Object built-in Gaia's memory.

もふ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方黒切札 the Object built-in Gai  
a's memory .

### 【Nコード】

N8902T

### 【作者名】

もふ

### 【あらすじ】

仮面ライダーWが、風都をミュージアムと財団Xの脅威から救って半年。探偵、左翔太郎はある情報を元に向かった先で、幻想郷へと迷い込んでしまう。

風都に戻る為、そして幻想郷に起こった新たな異変を解決する為に、かつて大切な相棒を失った“ハイフポイルド半人前”は、幻想郷の少女達と共に戦う事を決意する。

「どんな世界だろうが、そこに人々を泣かせる悪が蔓延るなら止め

るさ。この左翔太郎が…仮面ライダーがいるかぎり」

後に“記憶機異変”<sup>メモリ</sup>と呼ばれる事件が今、幕を開ける。

オリジナル作品メインのもふが初挑戦のクロスオーバー作品となります。宜しければお付き合ってください。

## #0 Pの思い出／或る探偵の追想（前書き）

Caution!

この作品は東方Projectと仮面ライダーWのクロスオーバー作品となっております。

独自解釈やそれに基づく捏造設定、キャラクターの性格などに皆様の認識と違うところがあるかと思えます。その点を、十分にご留意頂けたらと思います。

これまでの仮面ライダーWは！

「いくよ、翔太郎。最後の…」

「ああ……最後の！」

『変身ッ！！』

「人を愛する事が、罪だとても…？」

「…この事は、姉さんには内緒にしておいてくれ」

## #0 Pの思い出／或る探偵の追想

#0 Pの思い出／或る探偵の追想

別れの時が来た。まさにその時を迎えた“彼ら”は一人、そこに佇んで居る。

『大丈夫…これを閉じても僕たちは永遠に相棒さ。この地球が、無くならない限り』

少年は、最期の時を前にして笑っていた。どこか冗談めかしたその声色は、彼を思ってたものだったのだろうか。

『……………ッ！』

男は、最期の時を前にして流れる涙を止められなかった。ずっと、共に戦って来た相棒を失う事が辛くて堪らない。

『泣いているのかい？翔太郎』

ハードボイルドが、聞いて呆れるね。とでも言いたげな。いつものような、からかうような悪戯めいた明るい声。翔太郎と呼ばれた男は、睨り上げながら、しかし彼の方を見る事は出来ずに何とか答えた。

『馬鹿言つな…、っ…！閉じるぞ…』

『さよなら。翔太郎』

「…………おう」

男の手が、扉を閉じるようにゆっくりと、今。“彼ら”が腰に巻く大きな機械を引き上げるように、閉じた。

少年の身体が、淡い緑の光に分解され消えて行く。その中に、涙が紛れていた事に翔太郎は気付いただろうか。

“彼ら”の腰から飛び立った鳥がひと鳴きして、風にさらわれるように溶けていった。

後には。男が一人、取り残された。その腰につけているベルトは、何かを差し込む二つの窪みの片方だけがぼっかりと空いていた。

風が、そつと彼の髪を撫でる。涙を流しながら、彼は何時までも空を眺めていた。

あれから、半年経った。

おっと。俺とした事が、どうやらいつも間にか夢を見ていたらしい。ハードボイルドな俺とて、麗らかな昼下がりの陽気には鉄の男の仮面さえ脱げてしまう。

俺は、左翔太郎。この風の街、風都で探偵をやっている。猫探しから警察じゃ取り合ってもらえない怪事件まで何でもござれだ。

半年前には、この街を泣かせて来た連中“ミュージアム”とその活動を支援していた“財団X”から、街を救った事もある。“二人で一人の仮面ライダー”として。もちろん、代償が無かった訳じゃ無かった。

今でも未だ、あの時の事を思い出す。

あれで良かったんだ。そう信じてる。後悔はしていない。それでも

なけりや、あいつに笑われちまう。いつまでもウジウジしてるのはハードボイルドには相応しくないよな。

俺はデスクに置いたハードカバーの分厚い本を手に取り、ぱらぱらと白紙のページを捲ってゆく。辿り着いたのは、あいつが残した、最後のメッセージ。

『僕が好きだった街をよろしく。仮面ライダー・左翔太郎！ 君の相棒より』

ぱたん、と本を閉じ、椅子の背凭れに身体を預けた。

俺はこれからもこの街を守る。仮面ライダーとして。だから、見守っていてくれよ。

なあ、フィリップ…。

#0 Pの思い出／或る探偵の追想（後書き）

次回・東方黒切札

「左が、消えた？」

「でも、“ミュージアム”はもう……」

「ハードボイルドが聞いて呆れるぜ……」

「これで決まりだ……！」



## #1 Sの失踪／消えたハーフボイルド

#1 Sの失踪／消えたハーフボイルド

風都、そこは人々が風と共に生きる街。その日はよく晴れた日だった。青い空に太陽が眩しく輝き、その日の光を受け、再建された風都タワーがぐるぐると回転している。

そんな風都の一角にある、喫茶店“WINDMILL”。その店内にて照井竜は、困惑していた。

「左が、消えた？ 所長、それはどういう」

「だからっ！ そのまんまの意味なんだって！ 二日前にフラッと出たばかり帰ってこないの！」

彼にそれを伝えて来た少女、鳴海亜樹子もまた、混乱しているようだった。その剣幕から冗談や嘘ではない事を理解すると、だからこそ意味する所の理解が遅れ、少しして照井は表情を険しくさせた。

「もしかして翔太郎君、フィリップ君が消えたショックで行方を眩ませちゃったんじゃない？」

「いや、それは無いだろう」

今にも泣き出さんばかりの亜樹子の言葉を、照井はすぐさま否定した。何故ならば彼は、照井の知る左翔太郎という男は、恐らく彼が知る中で誰よりもこの街 風都を愛しているからだ。

確かに半年前に彼の相棒が死んでから、翔太郎には時折暗い影が見え隠れするようになった。

だからといって、愛する街を守る為に戦って来た彼が自らこの街を投げ出すような真似はして来なかったし、しないはずだ。となれば、自ずと導き出される答えは決まって来る。

「何か、事件に巻き込まれた…か。恐らくは“ガイアメモリ”絡みの」

「でも、“ミュージアム”はもう…」

「ああ、潰したはずだ。俺達が」

半年前まで存在した組織、この街に秘密裏に“ガイアメモリ”を流通させ、自らを地球に選ばれし家族と称した彼らは、件の左翔太郎とその相棒フィリップ、そして照井竜によって打ち砕かれている。だからこそ、照井は事の不可解さにますます眉間に皺を寄せた。彼が消えた二日前から、“ガイアメモリ”絡みの事件は起こっていない。

それでもメモリ犯罪は、“ミュージアム”を壊滅させた後も何度か起こっていた。それだけ、地球の記憶を閉じ込めたそれはこの風都に深く浸透している。

そして風都署の超常犯罪捜査課に所属する照井と目の前の彼女が所長を勤める“鳴海探偵事務所”の面々が、今でも時々起こる特殊な犯罪を防いでいるのだ。

風都を守る希望の戦士、“仮面ライダー”として。

「とにかく私、翔太郎君の知り合いを片っ端から当たってみる！」

「分かった、俺の方もあいつのここ最近の動向などを調べて見よう。何か分かったらすぐに連絡する」

(左、お前は…どこにいる?)

早速行動を起こすべく立ち上がった亜樹子と別れ、喫茶店から出た照井の脳裏に、気障ったらしく笑う仲間の姿が浮かんだ。良く晴れた日だ、と照井は思い目を細めながら空を見上げた。彼が愛したこの街の風は、今日も吹いていた。

左翔太郎失踪、その二日前

某県、山中。鬱蒼と茂る木々が重なり合わさったそこは、葉の間から差す僅かな陽の光のせいで昼間すら薄暗く、地元の間も滅多に立ち入らないという。

そこに、ざくざくと草を踏み鳴らす足音が聞こえた。やがて木々の間から現れたのは一人の男。年は二十歳を過ぎたくらいだろうか。時代錯誤な服装はどこか70年代辺りのハードボイルド小説に登場する探偵のようであり、ハンフリー・ボガートよろしく黒いソフト帽を被った男は　　左翔太郎は大きく溜め息を吐いて、近くの切り株に腰を下ろした。流石にそれなりの格好をして来るべきだったか。お気に入りの靴の汚れにやれやれと肩を竦め、更に視線を周囲の木々に巡らせる。

「…地元の人によれば、この辺りなんだけどな」

事の発端は、彼が信頼する情報屋から“風都の外で光る奇妙な鳥を見た”という奇妙な噂を手に入れた事に始まる。

それこそUFOを見た、というような眉唾物の話だが、“ガイアメモリが絡んでいそような不可解な情報を集めてくれ”と頼んでいたの

は翔太郎自身だし、とりわけ“光る奇妙な鳥”を翔太郎が出所の分らない与太話と一蹴する事は出来なかった。

光る奇妙な鳥、それを聞いて始めに浮かんだのは、自分に街を、平和を守るよう託して消えて逝った唯一無二の相棒の、理知的な姿。翔太郎は酷く悩んだ。本当はすぐにも飛び出して行きたかった。しかし街を、風都を守る使命を投げ出す訳にはいかない。

しかし結局、こうして風都の外にまで出て来てしまっている。仲間達に言わなかったのは、彼が未だその事を引きずっていると心配させたくは無かったからだ。それが我が儘であると、翔太郎は自覚していた。それでも、約一年もの間、共に過ごした相棒の手掛かりを有り得ないと分かりつつ追い求めていた。

「ハードボイルドが聞いて呆れるぜ…」

彼が信条とする在り方と余りに掛け離れた今の自分を顧みて自嘲気味に翔太郎は呟き、そして膝に力を込めた。余り長居が出来ないのは変わらない。もうしばらく探したら諦めよう、そう思い立ち上がった瞬間だった。

地面が、無い。

「はっ？」

思わず間拔けな声が口腔から漏れ出た。眼下には黒い空間が広がっている。しかしそれは土では無く、地面ですらなかった。と次の瞬間、翔太郎は猛烈な浮遊感と、物理法則にしたがって落下していく身体を自覚した。

「おおおああああっ!!!?」

光が急速に遠のいて行く。悲鳴を上げながら、足をばたつかせ、宙を掻く。何も無いのだから当然何かに引つ掛かる事も無い。

落下は止まらず、しかし地面は見えて来ない。そもそも翔太郎が居たのは山の中腹で、尚且つ崖など付近には存在しなかったし、土砂崩れが懸念されるような天候でも無かった。音も無く落ちたのだ。何故か？

翔太郎はお気に入りのハットを必死に押さえながら胸中に浮かぶ疑念を拭い去れないでいた。“ドーパント”だろうか。しかしその可能性を翔太郎は自ら否定した。風都でさえその流通量は減少の一途を辿っている“ガイアメモリ”の使用者が、こんなところに都合良くは居ないと踏んだからだ。疑問は晴れない。辺りは真っ黒に塗り潰され、翔太郎の目には何も映らない。ただ落下している事実が風となり身体にぶち当たり、その音が耳に入るだけだ。

と、出し抜けに視界が開けた。舞台の幕が上がったように辺りは明転し、眩しさに一瞬目を開けるの躊躇った翔太郎は自分がどこにいるのかを悟った。空中だ。比喻等ではなく、本当に、彼の身体は空に浮いていた。もう少し詳しく言うと、今も落下しているのだ。遠くの方に青々とした山々が見えた。

訳が分からない、しかしそうしている間に地面が見えて来る。このままでは翔太郎の身体は確実に重力に従い地面に激突し、凡そ名状しがたい有様になるだろう。

「つくそ！」

もはや考えている暇は無かった翔太郎は片手でハットを押さえたまま、もう片方の手でジャケットの内側のポケットから何やら掌にはやや余る大きさの赤い機械を取り出すと、腹部にあてがった。すると一人で銀色の帯が左右から飛び出し、腰に巻き付きベルトのよ

うな見た目となる。更に長方形の細長い何かを掴み、そのボタンを押し込んだ。

《 ！ 》

強い風に煽られ聞き取れないが、何やら力強い呼称が鳴り響いたと思うとそれを巻き付いた赤い機械の上部、溝になった部位に差し込んだ。地面はもう、数百メートルの所まで来ている。翔太郎はすぐさま差し込んだ長方形ごと機械を傾けた。

「変身！」

《 ！ 》

翔太郎の身体に、凄まじい勢いで風が宿る。と、爪先から微細な何かが寄り集まると迅速に翔太郎の全身を包み込んでいく。それが完了した時、落下しているのは最早翔太郎の身体では無く、代わりにそこに現れた鈍色の影はそのままちよつと落下地点に流れていた川に盛大な水飛沫を上げて落下していった。

清らかな流れを湛える川があった。その川は、命を育み魚達を育て、また人々に生活するための潤いを与えた。

青々とした木々に囲まれ、川のせせらぎを聞いていた少女はふと、その視界に何かを捉えた。人よりも発達したその視力は、それが何なのかすぐに気付いた。

人間だ。

打ち上げられたように上半身は大きな岩に引つ掛かり、そして未だ川の流れに身体の半分を沈めている。あのままではいずれ流され溺れ死ぬだろう。それを黙って見過ごせるほど、彼女は…河城にとりは冷酷では無かった。鮮やかな青い髪を揺らしながら素早く駆け寄ると、にとりは岩に掛かっていた両腕を掴み思い切り引つ張った。

「よ、いつしょ！」

何とか川岸へかの人物を引き上げ、その顔をまじまじと覗き込む。呼吸はしているようだから、恐らくあそこにしがみついて力尽きたのだろう。その見慣れない格好から彼が外来人である事を判断したにとりの行動は早かった。

すぐさま彼をおぶさるようになると、携帯端末を取り出し何やら入力を始める。すると程なくして、彼女の元に唸るような音が聞こえて来た。木々の間をすり抜けながら現れたのは鮮やかなブルーグリーンの車体を持つ、二輪の車。外の世界で“バイク”と呼ばれている代物だ。それに跨がると背中にびしょ濡れの彼を乗せ、にとりは余計な妖怪が寄ってくる前にその場を後にしなければならぬ。この山は余所者には厳しいし、何より外来人ならば、このまま野垂れ死ぬか他の妖怪の餌になる他ない。目指すのは、人里だ。外来人にとってこの世界で安全なのはまずそこだ。博麗神社がベストだが燃料が保つかは分からない。

にとりのオフロードバイクは、およそ自然豊かな山に似つかわしく

ないエンジンの唸りを響かせながら、その場を離れて行った。



#1 Sの失踪/消えたハーフボイルド(後書き)

次回・東方黒切札

「あんたが俺を…？」

「…そうか、“外来人”だな」

「自己紹介がまだだったな。私は上白沢 慧音」

これで決まりだ…！

## #2 Sの失踪／迷い込んだ世界（前書き）

東方黒切札、今回の依頼は！

「左が、消えた？」

「もしかして翔太郎君、フィリップ君が消えたショックで行方を眩ませちゃったのかも…」

「おおおあああ！？」

## #2 Sの失踪/迷い込んだ世界

#2 Sの失踪/迷い込んだ世界

風が吹き込んで頬を撫でた。そんな気がして、翔太郎は目を覚ました。天井を見上げている事から、自分が屋内にいる事は察知した。その材質からして病院でも、見知った鳴海探偵事務所でも無いと知る。

民家だ、一般的な。しかし、何故。

「……」

翔太郎は身体を起こすと所々が鈍く痛んだ。それでも遙か上空から地表に激突する前に“メタルメモリ”を使ったのは我ながらさすがの機転だと思う。おかげで骨などに異常は無さそうだった。

辺りを見渡す。畳、襖、障子…まさに日本家屋といった所だろうか。枕元に自分の服が綺麗に畳まれて、その上にお気に入りのハットが乗っている。無事だったのだと嬉しそうに笑い、そこで翔太郎は、自分が青地の着流しを身に着けている事を悟った。そしてその下の自らの身体には所々、包帯や湿布が見える。

「ああ、気が付いたのか」

すう、という音と共に襖が開いた。そこに立っていたのは特徴的な形状をした青い帽子を被った、薄青い長い髪の女性だった。彼女は翔太郎を見るなり安堵したように微笑む。

「…あんたが俺を？」

「正確にはここまで運んで来たのは違っけれど。流石に驚いたよ。川から流されて来ただなんて。崖から足でも滑らせたにしては怪我は無いし…水だ、飲むと良い」

流石に空から落ちて来たなどと荒唐無稽な事を言う訳にもいかず、翔太郎は打ち所が良かったんだろうなどと適当に誤魔化した。

「俺は、どの位この状態でした？」

「そっだな。ざっと、二日ってところか」

翔太郎は、口に含んだばかりだった水を盛大に吹き出した。

「二日アツ!？」

そして目を剥いた。予定外だとはいえ、二日も風都を開けるつもりは無かった。その驚きように女性の肩が僅かに跳ね上がる。

「やべえな、早く風都に戻らないと…」

「ん、風…なんだって？」

女性が要領を得ないとばかりに首を傾げた途端、翔太郎は驚愕の表情で固まった。

風都といえば、その街に多く点在する風車による風力発電により“風のエコの街”とまで呼ばれる日本でも有数の都市だ。翔太郎が二日前に訪れた土地では皆、当然風都を知っていた。翔太郎はそれを口早に説明して見せる。

「すまない、私はその風都とやらを知らないんだ。それにこの辺で人間が大勢住んでいるのはこの人里くらいだし」

「なっ…!?!」

有り得ない、とばかりに翔太郎は絶句する。さらに人里という言葉に違和感。それではまるで、地名で区別する必要がないほど街が無いかのようだ。

そこで女性は、混乱する彼を余所にぽんと拍手をうち、納得したと言ふ風に頷いてみせた。

「…そうか、“外来人”だな。それなら齟齬があっても不思議じゃない」

いまいち一人で納得されてしまったような気がして翔太郎は訝しげに首を傾げる。それに気付いた女性は、要点を掻い摘まんで、それでいて非常に分かりやすく翔太郎の置かれた状態を語り出した。

〈少女説明中〉

そして分かった事はこうだ。

ここは、“幻想郷”と呼ばれる外の世界とは異なる世界であると言ふ事。

ここが外の世界で忘れ去られ幻想と化したもの達の楽園であると言ふ事。

その性質上ここでは人間の他に幽霊や妖怪、果ては神と言った外の世界では非科学的とされ、存在しないとされものがある事。

そして時折ここには彼のように結界で分かれた外の世界、すなわち翔太郎の住む世界から放り出されてしまった者が流れ付く事、そういう人間を“外来人”と呼ぶ事。

そして元の世界に戻るには山にある博麗神社に居る“博麗の巫女”に頼むしかないと言う事。

「信じらんねえ……」

だが、実際に自分は山腹から一瞬にして空に“落ちて来た”のだ。

“ガイアメモリ”の効果かと思いきや、それよりも遙かな神秘に翔太郎は触れている。事実が、圧倒的な存在感を持って翔太郎を納得させざるを得なくした。

「無理も無いさ。だけど貴方は運が良い、右も左も分からない外来人は、すぐさま妖怪に食われるか道に迷って餓死するのが関の山だから」

その言葉に翔太郎はゾツとした。いざとなれば撃退して見せる自信はあるが、気絶している間に襲われなかったのは、幸運と呼ぶ他無い。

「それで、その博麗神社ってのはここからどれくらいになるんだ？」

「さほど遠くは無いが、貴方はもちろん飛べないよな？」

「…何でもありなんだな」

翔太郎はぼやいた。この世界では何かしら能力を持つ者達が存在していて、彼らのポピュラーな移動手段が飛行だというのだ。人間でさえ飛ぶらしいのだから驚きだ。相棒がいたら一週間は“検索”で費やすだろう。

「ここは外の常識がことごとく通用しないらしいからな……それは良いとして、徒歩ならそれなりに掛かってしまうな。少なくとも、今から出たなら夜になってしまう。貴方が怪我をしてるのも考えれば直ぐさま動くのは得策じゃないと思う」

腕を組み、黙り込む。乗って来た“ハードボイルダー”もこの分では置き去りにされてしまったであろうし、そうなると徒歩以外に移動手段が無い。加えて翔太郎はそれなりに怪我を負っている。

極め付けに右も左も分からない未開の土地、そして夜の登山は危険と来ている。

俗にいう手も足も出ないと言う奴だ。

「良かったら怪我が治るまでここに泊まっていくと良い。この家も私一人で済むには手に余るし」

「有り難いのだが…怪我の手当てまでしてもらった上に泊まるだなんて」

しかし他に行く宛が無いのも事実だし、宿などがあつたとしても彼が持っている通貨がこの世界でも使用できる保証も、また無かつた。結局、彼女の厚意を断る事などでできず、翔太郎はその言葉に甘える事にした。そこで彼女は思い出したかのように手を叩いた。

「自己紹介がまだだったな。私は上白沢 慧音。この里の寺子屋で

教師をやっている」

慧音と名乗った女性は理知的な笑みを称えて右手を差し出して来た。翔太郎もそれに倣い、自らの名前を名乗る。

「俺は左翔太郎、探偵だ。悪いけど世話になるぜ、宜しくな？ 慧音さん」

二人はしっかりと握手を交わした。こうして翔太郎は、上白沢邸に世話になる事が決まったのだった。

風都。そこにはかつて“財団X”と呼ばれる組織の拠点の一つが在った。既に“ガイアメモリ”から手を引いたらしくその消息は絶えたが、その廃棄されたままの施設の一つに照井竜は来ていた。彼が手にしているのは、持ち出される事なく破棄されたあるプロジェクトの研究資料だった。

「“ボーダー”のメモリによって次元の境界の断裂を形成し、別世界へと侵入する計画：か。俄かには信じられんな…」

照井は書類に目を落しながら呟く。しかし手は止まらずにはらばらとページを捲っている。ここ数日、左翔太郎の消息を負う中で彼が鼻屑にしている情報屋、通称ウォッチャマンの証言から翔太郎が



向かった場所が特定出来た。

彼は独自に“ガイアメモリ”が関連していそうな珍事などを片っ端から調べていたようだった。しかしながら、照井はそこに別の理由がある事を確信していた。

“光る奇妙な鳥”とは、彼が仮面ライダーに変身した際の鳥型強化ツール“エクストリームメモリ”とその特徴が類似していた。それは彼のかつての相棒が自身をデータ化してその身体をメモリ内に宿して移動手段としていた事もあった。つまり、だ。

(左は、今もフィリップの影を追っているのか…)

果たして追跡は成功した。かのように見えた。某県の山の麓に、彼の愛車であるバイク“ハードボイルダー”が発見されたのだ。照井は山岳救助隊などと協力し、彼を行方不明者として捜索に当たったのだが、肝心の山中にはどこにも彼はいなかった。比較的真新しい足音を発見した事でそれが翔太郎のものと推測し、周辺一体を血眼になって探したが彼はその場はおるか忽然と姿を消してしまっただの。まるで神隠しにあったかのように。

そして、つい昨日の事だった。回収された“ハードボイルダー”が、忽然と消えたのだ。主の後を追うかのように。いよいよガイアメモリ事件の様相を呈して来た事態を重く見た照井はこうして、ガイアメモリに関わった組織や研究機関を洗っていたのだった。半年前、この街のガイアメモリ製造・流通の元締めともいえる“ミュージアム”を潰して尚、未だこの街では“ドーパント”による犯罪は絶えない。

「このセンで調べてみるか…」

いわば勘という奴である。それでも照井はどこか確信めいた感情を抱いていた。資料を閉じ、それが輸送されたとおぼしき場所の位置を特定するべく、照井はその場を後にした。

## #2 Sの失踪／迷い込んだ世界（後書き）

次回・東方黒切札

「おかえり、翔太郎さん」

「慧音先生え！！翔ちゃん！大変だ！」

「これで二体目…全く、どうなってるのよ」

「後は任せな」

「変身」

これで決まりだ…！

#3 再来のM / 男の好きな風 (前書き)

これまでの東方黒切札は！

「…信じらんねえ」

「良かったら暫く泊まって行くと良い」

「私は上白沢 慧音」

### #3 再来のM / 男の好きな風

#3 再来のM / 男の好きな風

「翔ちゃん！今日は川魚一匹おまけだ！こないだウチの猫を見付けてくれた礼さね！」

「悪いな、おっちゃん！もらつとくぜ！」

「しょーたるー！また“おとこのびがく”つての教えてくれよー！」

「あー！今は買い物途中からまた今度な？…つか呼び捨てにすんなって！」

翔太郎が幻想郷に迷い混んでから、早くも一週間と三日が過ぎようとしていた。勿論、それまでの間現実世界への帰還を試みなかった訳ではない。博麗神社には慧音の案内によって訪れたのだが、肝心の博麗の巫女が出払っていたのだ。

聞くところ博麗の巫女は迷い込んだ外来人を元の世界に帰すだけでは無く、幻想郷にて起こる異変の解決も請け負っているらしい。

恐らくは現在も何らかの調査に出ているのだからとは慧音の談だ。これではどうしようも無いと人里に引き返した翔太郎は、ただ無為に時間を過ごすのを避けるため、一宿一飯の恩義もあつてか自分から人探しや力仕事、寺子屋の手伝いを買って出たのだ。それはもちろん恩返しのためでもあつたし、相棒の事を考えない為でもあつた。結局翔太郎は、この一週間足らずで里にすっかり馴染んでしまい、人々からも「翔ちゃん」と親しまれるまでになっていた。

「複雑だぜ……」

この幻想郷にも良い風が吹く。今の生活にどこか居心地の良さを感じて居るのも事実だった。それでも自分はいずれはここを去る身、その時やはり迷うのだろうか。

自らが信条とする鉄の男には程遠いななどと翔太郎は自嘲気味に笑って、ソフト帽を被り直すと上白沢邸に足を向けた。

〈探偵移動中〉

ガラガラと戸を開けて翔太郎は上白沢邸に帰宅した。すると普段居間として使っている部屋からひよこつと慧音が顔を出した。

「おかえり、翔太郎さん。ご苦労様、何時も助かってる」

「構う事ねえよ、俺こそ居候の身だしな。とはいえ長居するわけにもいかねえから、明日もう一度博麗神社に行ってみる」

肩を竦め翔太郎は笑う。台所に向かいながら、それを聞いて慧音は顔を曇らせる。その表情の僅かな変化を見抜いた翔太郎は不思議そうに首を傾げた。

「いやなに。私もここ最近、知人の所で色々聞いたんだが、どうも今回巫女が調査している異変というのが少し厄介なものらしいんだ」

過去に、幻想郷中に広がった紅い霧の異変、春が来ない異変など彼女はこれまでに数々の事件を解決して来たらしい。そんな彼女が調査に手間取っているのは、これまでと違い異変により現れたと思われる“怪人”が、何体も出現しているという事、そしてその怪人がこの世界での所謂ルールである非殺傷の“弹幕”により雌雄を決するというやり口を取らず襲って来るという厄介な行動を取る、という二点が主な理由と推測されていた。

倒せなくは無いがやりづらい

というのが、慧音の友人が交戦した感想だそうだ。

そしてもう一つ、翔太郎の心に引っ掛かるのはその怪人が再起不能となると、人間になるのだという。まるで何かの力で以てその姿を変えられてしまっていたかのように。

(まるで、ドーパントだな…)

人里以外でもその目撃情報は寄せられていて、里は現在自警団の増強を急いでいる。

とにかく、と翔太郎は止めどない思考に区切りをつけた。まずは今日の夕飯を作る事を考えよう。調べるならその後でも良い。

翔太郎が上白沢邸に住まわせて貰ってからというもの、料理も慧音の手伝いをしながら少しずつ覚えている。翔太郎のぎこちない手際に色々教える慧音は傍から見ればどこか初々しい恋人同士のように見えなくもなかった。

もちろん当人らが気付く筈もないのだが。

「慧音先生え！！翔ちゃん！大変だあ！」

少し外が騒がしいな、と翔太郎は思う。それでも料理を続けていると出し抜けに聞こえて来た声に翔太郎は危うく自分の指を切る所だった。その声色は切迫の二文字に相応しい。

一瞬間を見合わせた翔太郎と慧音はすぐさま入口に飛んで行く。玄関には、四十も半ばという所だろうか。男が血相を変えて、息を切らせて立っていた。

「田六さんじゃねえか、どうした？」

「さ、さ…里の入口に…化けもんが！逃げ遅れた年寄りと子供を助けに行つた自警団の若衆も歯が立たねえつてもんだから…もう俺はどうしたら良いのか…！」

「いいか、田六さん。出来るだけ全員にこの事知らせて里の反対側の門に集める！」

その言葉に翔太郎の目が大きく見開かれた。しかしすぐさま立ち直り、田六と呼ばれた男の両肩を掴みしつかり言い聞かせる。それを聞いた田六が慌てながらも頷くのを確認すると玄関の壁に掛けてあるハットを引つ掴み駆け出した。一拍遅れて慧音が飛び出して行く。

町の入口付近から、僅かに火の手が上がっているのが見えた。翔太郎は息を切らせて走り、すぐさま里の入口広場に辿り着いた。侵入



されてしまった、慧音は翔太郎の背中を追いながら歯がみした。もつと早く侵入に気付いていれば、歴史を食らう己の力で人里を隠す事ができたのに。しかしそれを今悔やんでも仕方が無い、被害を最小限にしなくては。

既に殆どの避難が終わっているのか人影はほぼ無かったが、傷ついた自警団が逃げ遅れた子供や年寄りを庇いながら竹槍や鍬などで“そいつ”を威嚇しながらじりじり下がっていた。

そして翔太郎はそれを目にした途端、強烈な胸騒ぎに襲われた。その火炎を全身に纏って燃え盛る体、そして血液の代わりにその体を流れるのは赤黒い溶岩。

そいつは紛れも無く、かつて風都に於いて罪を犯し、そして翔太郎達によって倒された溶岩の記憶を有する“マグマメモリ”により生ずる怪人“マグマ・ドーパント”だったのだ。

「おいおい…洒落になってねえぞ…」

「あれは、まずい！」

何故、という疑問が翔太郎の行動を鈍らせた。その間に追い付いてきた慧音が先に飛び出した。凄まじい勢いで空へ飛び上がったかと思つと彼女の周囲から滲み出すように光の玉が生み出され次々にマグマ・ドーパントに着弾する。たちまちその姿は噴煙に紛れて見えなくなった。

「っ…やったか!？」

手応えはあった。慧音とて里の中では一番の実力者である。里の守護者として力を持たない人々を守る事もまた、有事の際の彼女の仕事だった。

「くッ！」

しかし返答とばかりに噴煙の中から飛んで来た溶岩石を慌てて慧音は展開した弾幕で迎撃し粉碎する。下手に避けようものなら民家に飛び火してしまうからだ。

「慧音さん！こいつらを逃がすから里の外におびき出せねえか！」

「心得た！」

しかし効果はあるようだった。何発かの光の弾が敵の動きを鈍らせる。加えてマグマ・ドーパントは頭に血が上ったかのように上空の慧音を撃ち落とそうと躍起になっている。

慧音は飛行しながら里の外へと向かいマグマ・ドーパントを誘い込む。

彼らを逃がすには今しかないと踏んだ翔太郎は直ぐさま自警団達に駆け寄り逃げるように促す。走り去る彼らを見て一安心し掛けた翔太郎の視界の端で腰を抜かして座り込む子供の姿を捉えた。

それは数刻前、翔太郎に親しげに話しかけて来た魚屋の息子であり慧音の寺子屋の生徒だった。

「市助！」

こちらに気付いたマグマ・ドーパントの火炎弾が飛来する。慧音は逃げながら疑似的な弾幕を撃ち落とすのに精一杯だ。翔太郎は咄嗟に少年を抱き抱えて転がる。数瞬前まで立っていた地面が焦げ付いた。

「しまっ…翔太郎さん!？」

更に追撃とばかりに火炎弾が次々と翔太郎を襲う。避け切れないと悟った彼は市助を庇うようにその両腕を広げて立ち塞がった。

「伏せてッ！」

不意に上空から浴びせられた声と、眩い色とりどりの弾幕に翔太郎は思わずハットを押さえるようにし頭を庇う。

火炎弾を撃ち落としてなお飛来する弾幕は更にマグマ・ドーパントの体を後退させた。翔太郎達の前に降り立ったのは紅白の独特の衣装を来た少女だった、その銀の髪が風に靡く。その背中には、炎で出来た翼が広がっていてまるで不死鳥のようだと翔太郎は思った。

「これで二体目…全く、どうなってるのよ」

彼女はぼやくと再び上空へ上がった。それを見ていた慧音の表情が希望に満ちたように輝く。

「助かった！妹紅！」

「とりあえず、こいつ外に追っ払うよ！」

「ああ…！」

二人は抜群の連携のもとマグマ・ドーパントを里の外へと追いやつてゆく。市助を立ち上がらせ、逃がした翔太郎は自らも里の外へ走る。

状況はあまり良くなかった。怒りによって燃え上がる身体に対し弾

幕は、その殆どが触れるより早く纏う熱によって打ち消されてしまっていたからだ。

さらに妹紅と呼ばれた少女は見る限り炎を扱う。ドーパントの性質上、非常に相性が悪い。

「ッやり辛いつたらありゃしない！」

苛立たしげな言葉が妹紅の口から零れる。焦れて先に隙が生まれたのは慧音だった。今までと違い急速に降下して距離を縮めてゆく、しかし回避に精彩さを欠いた隙を狙われ、飛来する火炎弾を避け切れない。

「うああっ!?!」

「慧音!?!」

撃墜され、姿勢制御が出来ずに地面に激突する筈だった彼女だが、しかしそれは先に回り込んでいた翔太郎によって防がれた。尻餅をついて格好良くとは行かなかったが翔太郎は慧音を座らせてから無事を確認し、立ち上がる。

「…後は任せな」

相手がドーパントである以上、それは翔太郎の専門分野だ。徐に、上着の内ポケットから武骨な赤い機械を取り出した。

これには慧音も妹紅も怪訝に首を傾げる。それを余所に翔太郎はその左右非対象の赤い機械“ロストドライバー”を自分の腹部にあてがった。と、機械の両端から銀色の帯が伸びて腰にしっかりと固定される。それはあたかもベルトのような姿になり、もう一つ。翔太郎はポケットから小さな黒い長方形のモノを取り出した。

《JOKER!》

それが声を発した事で二人は思わず驚いて目を丸くする。彼の持つ黒の長方形をした物体、“ガイアメモリ”に内包された記憶が起動し、それをベルトの右側に付いた溝に叩き込むように装填した。

紫色の波動が、“ガイアメモリ”から発せられる中、翔太郎は上体を捻りながら拳を握り込み、右腕を左斜めに曲げて構え、指先を立て気取った手つきに変えながら左手で右にスライドするようベルトの上部を通過させ、さながら腕で“J”を描きながらスロットを斜めに傾けた。

「変身」

《JOKER!》

「んなっ!?!」

そして、翔太郎の身体に竜巻が起こった。と爪先から徐々にその身体へ黒い装甲が寄り集まってゆき覆われてゆく。それが頭頂部まで達し、その身体はすっかりと異形の姿を成していた。両目の位置の赤く大きな複眼がキラリと輝きアルファベットの“W”を模した角が陽光で映える。

「そ、れは…?」

何故この世界にドーパントがいるのか。納得いく答えは見当たらない。それでも、例え風都の外であろうと、翔太郎のやる事は一つだった。

平和に暮らす人々を泣かせる悪を探偵…“仮面ライダー”、左翔太

郎は決して許さない。

「俺は仮面ライダー、ジョーカー……！」

漆黒の戦士が、気障ったらしく左手をスナップさせながら名乗る。

それは紛れもない翔太郎の声だった。それは、かつて風都を守った

“切り札”。左翔太郎がたった一人、戦う為の姿。黒き切り札、“

仮面ライダージョーカー”がそこに確かに立っていた。

### #3 再来のM / 男の好きな風（後書き）

次回・東方黒切札

「ライダーキック」

「お前もあの化け物の仲間だろっ！」

「侵略者風情が、この幻想郷を好きにできるなんて思わない事ね」

「これで決まりだ…！」

#### #4 再来のM/仮面ライダー（前書き）

東方黒切札、今回の依頼は！

「おいおい、洒落になってねえぞ……」

「いったん里の外に追い払うよ！」

「俺は仮面ライダー、ジョーカー……！」



#### # 4 再来のM / 仮面ライダー

##### # 4 再来のM / 仮面ライダー

「…行くぜ？」

黒い戦士となった翔太郎は、左手をスナップして気合いを静かに高めると、現れた存在にたじろいだマグマ・ドーパントへ走って距離を詰める。まずは突き出した左拳を一発、更にもう一発と、腹部に数回叩き込みマグマ・ドーパントの体をくの字に折らせた。そして僅かに離れた距離を、すかさず詰めたのは右脚からの鋭い蹴りだ。それが顔にあたる部位を見事に捉えた。そして返す足の動きでの踵の一閃。往復して顔面を激しく揺さぶる。

「おらア！！」

更にその胸部を蹴り抜いて地面を転がした。立ち上がったマグマ・ドーパントがすかさず無数の火炎の弾丸を撃ち込んで来る。しかしそれは翔太郎に届く事なく、横合いから慧音が放った密度の高い弾幕にぶち当たり消えた。

「翔太郎さん！大丈夫か？！」

「ああ、助かったぜ」

礼もそこそこに、好機と見た翔太郎は再び距離を詰めると慧音と仮面ライダーのどちらに狙いを定めるかをあぐねているその隙を見

計らい、体当たりの要領でそのバランスを崩させて、その胴体を力の限り殴り付けた。真上から振り下ろされた腕を弾くように逸らし、もう一度駄目押しで殴り付けるとマグマ・ドーパントは立ったまま地面を削りながら後退し、がっくりと膝を折った。しかしその隙を突かれまいと火炎弾を放つて来る。それらを最大限躲しながら、ダメージを押さえ、仮面ライダーはとうとうその火の弾を目の前で打ち出そうとした右腕を蹴り上げた。そうして出来た隙に連続パンチが決まり、フィニッシュのアップercutはその図体を宙に浮かせた。

どしゃ、と音を立てながらマグマ・ドーパントは地面に落下し、ダメージからか上体のみ辛うじて起こしている。

それを見て、ロストドライバーに収まる“ジョーカーメモリ”を引き抜くとベルト右腰側に配置された黒い箱のような部分、“マキシマムスロット”に差し込み、上から軽くタップする。

《JOKER! MAXIMUM - DRIVE!》

「これで決まりだ。…ライダーキック」

翔太郎は静かに宣言すると同時に、助走をつけて高く飛び上がった。それは普段から飛翔能力を有し、空を飛べる彼女らからすれば何の事は無いが、単なる人間にはあり得ない程にその跳躍は凄まじかった。そして右脚から紫色のエネルギーを纏いながらよろよろと立ち上がったマグマ・ドーパントに突進した。これぞ仮面ライダージョーカー必殺の一撃、ライダーキックである。

狙い違わずマグマ・ドーパントに突き刺さった飛び蹴りは、激しく吹き飛んだその身体を爆散させた。

後には、力無く地面に倒れる人間とその腕から排出された“マグマメモリ”が残る。それは地面に落ちるよりも早く薄氷の割れるよう

な音と共に砕けた。

「しっかし…」

何故、破壊した筈の“ガイアメモリ”が存在しているのか。倒れている男を見やった。死んではない、 “メモリブレイク”による一時的な昏睡だ。その足下に落ちる破壊されたメモリを拾い上げた翔太郎は表情を険しくする。

「うおあつ!？」

いきなり、後ろから衝撃が襲った。仮面ライダーの外骨格を持つとしても衝撃を逃がし切れず翔太郎は吹っ飛んでから地面を二転三転して立ち上がる。そこに炎の球が無数に飛来して、爆発する。咄嗟腕を交差させて防ぐが、爆風でよろけた所に蹴り脚が伸びて来たのは対応出来なかった。顔面を見事に捉えた蹴りは仮面ライダーの身体を後方に激しく蹴飛ばした。

「つてえ…何しやがんだ!？」

膝を突いて身体を起こした翔太郎は声を荒げてこちらを睨む少女、妹紅を見た。

「お前のその姿…、さっきの奴の同類だろっ!」

妹紅の目は敵意に満ちている。怒りがまるで炎のように感じ、次の瞬間接近して再び振るわれた拳を、今度はいなした。しかし、速い。それは以前戦った事がある“ヒート”のドーパントもかくやという身体能力、そして格闘のセンス。この世界じゃ生身で仮面ライダーとやり合える奴までいるのかと翔太郎は驚愕を禁じ得ないでい

た。

慧音が諫めるような声を上げるがそれすら耳に入っていないかのように、炎の拳が次々に仮面ライダーに迫る。

「おい、よせ妹紅！」

「っ！？おい、人の話を…っ！」

「問答無用！」

ドーパント相手でも無いのに、仮面ライダーの力を行使する訳にはいかない。とは言えこのままではやられてしまう。翔太郎にそう思わせるほどに、彼女の一撃は重く、的確だった。直撃を避けるための防戦一方の中、妹紅は好機と見たか一際大きく腕を振りかぶった。

「いい加減に…」

しかし、腕は振るわれる前に彼女の背後に立った人物に掴まれてそのまま後ろを向かされる。そこには、上半身をこれでもかと逸らせた慧音の姿があった。呆気にとられた妹紅は、次に自分の身に降り懸かるモノが何なのかを、知りながらにして動けなかった。それ程まで頭に血が上っていたのだから。

「しないかッ！！」

ガンッ！！

翔太郎は思わず身を竦めた。慧音は凄まじい勢いで上体を元の位置に戻す動きで放ったのは所謂、頭突きである。しかし、まるで鈍

器で殴打したかのようなとんでもない音がしたのは翔太郎の気のせいだろうか。

手加減一切無しの頭突きを受けた妹紅が切れた額から血を撒きながら大きくのけ反ってこちらに倒れ掛かるのを呆気にとられていた翔太郎は慌てて受け止める。見れば妹紅は完全にノビているのか目を回していた。後には申し訳なさそうに帽子を被り直した額の腫れている慧音と、未だ変身が解かれていない気まずそうな仮面ライダーが残された。

「すまない…彼女に代わって謝罪させてくれ」

「や、まあこんな成りだし仕片ねえよ…」

律義に頭を下げる慧音を宥めるようにフォロをいれる。変身解除しながら、それでも仮面ライダーを怪人と誤認されたのは何となく悲しい翔太郎であった。気絶した妹紅を抱き上げ、慧音と共に降り出して来た雨により黒い煙が僅かに立ち上ぼる人里に戻って行く。

幻想郷、その良<sup>う</sup>の方角<sup>かた</sup>にひっそりと立つ屋敷が一つあった。

のどかな風景は見るものの心をたちまち癒してしまうようなそんな自然に囲まれた場所、その屋敷の縁側に一人の女が座っている。長く波打つ金の髪に不思議なドレスのような、どこか東洋風の印象も受ける形状の服、そしてその頭に被る赤いリボンの付いた帽子。手に持つ扇を口許に運ぶ姿はさながら傾国の美女と言って差し支えない。ただ一つ、その全身から放つ胡散臭さが無ければ、だが。

八雲紫。境界を操る幻想郷の大妖怪たる彼女の名だ。

「博麗大結界に滲み込んで浸食するなんて…なるほど外の間人もやるわね…全く忌々しいわ」

「如何致しましょう、紫様。博麗霊夢も動き始めているようですが」

その傍らに、主よりもたつぷりとした服を来た短い金髪の女性が現れた。帽子から飛び出す二つの突起と腰の後ろ辺りから生えている金の柔らかなふさふさの九つの尻尾が彼女が人間ではないと言う事を表している。妖獣にして紫の式、八雲藍だ。そんな問い掛けを放つ彼女に紫は空を見た。

「んー…そうねえ。博麗大結界を突っ切って来たなら補修しないと不味いわ。霊夢が元凶を押さえるなら、私は裏方ね。藍、あなたや橙にも修繕手伝って貰うことになるかもしれないわ。…もつとも、元を断たないと一度綻びが生まれた以上時間稼ぎにしかならないでしょうね」

「その、「ガイアメモリ」とやらはそれ程までに…？」

「何せ地球の記憶を閉じ込めてある厄介な代物だもの。計り知れないわよ」

紫は呑気に言ってみせるがその眠たげな瞳の奥に剣呑な光が宿っているのを藍は感じた。かつてこれほどまで事態を重く、悲観的に捉える主を見た事があるだろうか。普段ならば有り得無いその様子に偉大なる妖獣たる彼女も危機感を覚えざるを得ない。早速出された指示を正確に遂行するべく、藍は早速結界修繕に向けて飛び立って行き、すぐに見えなくなる。

再び空へと視線を戻しながら、まあでも、と紫は一度目を伏せると危うい光を引っ込め誰とも無しに呟いた。

「こつちの手札にも“切り札”は来たようだし、まだまだ分からないわよ…侵略者風情が…この美しい幻想郷を好きに出来ると思わない事ね」

そう言っつて、幻想郷の大妖怪は意味ありげに微笑む。その視界の先で、空が微かに歪んだようだった。

#### #4 再来のM/仮面ライダー（後書き）

次回・東方黒切札

「翔太郎さん！そろそろお昼にしないか？」

「ふうん、探偵ね…あんな異形に変身する探偵なんか幻想郷にだって居ないけど」

「だが、それは一対一の話だろうか？もしも相手が呉服屋の娘さんを狙ったらお前は守りながら倒せるのか？」

これで決まりだ…！



**#5 襲撃者T / 新たなる脅威（前書き）**

これまでの東方黒切札は！

「俺は仮面ライダー、ジョーカー…！」

「お前もあの化け物の同類だろう！」

「やめろ、妹紅！」

## #5 襲撃者T / 新たなる脅威

### #5 襲撃者T / 新たなる脅威

マグマ・ドーパントの襲来から一日。翔太郎は破壊された家屋の上に登り、修繕を手伝いながら、額に伝って来た汗を拭った。

怪物は慧音と彼女の友人、藤原妹紅の手によって倒された事となり、翔太郎は自警団達を逃がすのを手伝った事になった。

仮面ライダーは自ら望んで讃えられるような者であってはならない。もともとこの名前も、風都の人々が自然に名付けてくれた名だ。下手に騒ぎになってしまうのを避ける意味で、翔太郎は仮面ライダーを秘匿した。

これで良い。そんな事を考えながら、真新しい材木を金槌で打ち付けていると、ふと下から声が聞こえた。

「翔太郎さん！そろそろお昼にしないか？」

視界に映ったのは慧音だ。一緒に仕事していた大工達から冷やかされながら翔太郎は家を降りた。慧音は困ったように笑ってから歩き出したのでそれに続く。

「里の被害が少なくて本当に良かった…本当に。翔太郎さんのおかげだ」

「良いって事さ、里のみんなには世話になってるし…こんな形の恩返しは嫌だったんだけどな」

「あいつは、何だったんだ？」

見れば、上白沢邸の前まで来て居た。外では話辛いと翔太郎は告げ、慧音もそれに賛成した。下手に噂が流布するのは避けられない。不安を煽ってしまつては駄目だ。そして、翔太郎は昼食の席についたのだが…

「…なんで、お前がここにいんだよ」

「居ちや悪い？」

開口一番、険悪な雰囲気。少し待っていて欲しいと慧音に言われた翔太郎は居間に行き、前日の少女、藤原妹紅が頼杖を付いて不機嫌そうな様子を隠そうともせず翔太郎の苦々しい台詞に返した。その額に、絆創膏が貼られているのが前髪が揺れた合間に見えた。

「あんたこそ、どうして慧音の家にいるのよ。何、彼氏なの？」

「ぶっ」

「妹紅！」

翔太郎は言葉に詰まり、丁度良く居間に入つて来た慧音が顔を真っ赤にしながら声を張り上げる。

二人だけではろくにお互いの情報すら交換出来ない事に頭を抱えた慧音は結局両者の紹介をすることになつてしまった。

迷いの竹林に人知れず住む少女、炭売りや竹林の奥深くにある“永遠亭”と呼ばれる医者が住まう場所までの人間の護衛などで生計を立てているらしい。また、慧音の友人でもありこうして人里にも顔を出すのだと言う。

「ふうん、探偵ね…あんな異形に変身する探偵なんか幻想郷にだって居ないけど」

それには口を閉ざさざるを得ない翔太郎。慧音が咳払いをすると口を開いた。このままではまた不毛な応酬が始まると踏んだのだろう。

「すまないな、妹紅は少し人見知りなんだ。本当は感謝しているさ」

「なっ…そんなこと！」

妹紅が何か言いたそうに身を乗り出すが、慧音が食前の挨拶を始めたので大人しく従った。翔太郎もそれに習う。

『いただきます』

「…で、翔太郎さん。そろそろ話してくれるか？件の怪物の事」

「そうだな…ドーパント、やつらを説明するにはまず“ガイアメモリ”の事から話さなきゃならない」

（探偵説明中）

「つまり、地球で起こった事象や現象を封じ込め、再現する事が出

来る“ガイアメモリ”…その強大な力に飲み込まれた人間が怪人化したのが」

「そう、ドーパントだ」

慧音は思わず口を閉ざした。地球の記憶する事象や現象を具現化した物体など聞いた事もなかった。それこそ魔法や妖術が珍しくない幻想郷においても、それはイレギュラーだ。

「…じゃあ、あんたがなったあれも、そのドーパントって訳」

黙って聞いていた妹紅が徐に口を開く。その視線は、敵意を持って翔太郎を射ている。何かしようなものなら直ぐにでも叩きのめすといった雰囲気だ。

「広義に言えば、な。ただドーパントってのは、人間に埋め込んだコネクタに直にガイアメモリを挿し込むから、力に吞まれて暴走状態になるんだよ」

そして、語りながら翔太郎は懐からあの赤い武骨な機械を取り出した。妖怪の山の河童が見れば垂涎のものであるう飾り気のない、一見用途の分からない左右非対象のそれを指差して翔太郎の説明が続く。

「俺達は、ガイアメモリの力に吞まれないようにこの“ドライバー”を介してメモリの力を借りる。ドーパントたちと戦うためにな」

慧音の脳裏に翔太郎の変身した姿が浮かぶ。あの炎のドーパントとは確かに異なっていたのは、機械制御されているからなのだろう。

「目には目を、という事が…」

「ああ、体内のガイアメモリを取り除いて破壊するには“マキシマムドライブ”でメモリを破壊するのが手っ取り早いからな」

翔太郎は、説明を終えて茄子の素揚げに齧り付いた。才色兼備とは誰が言った言葉か、慧音は料理も上手かった。

むくれて居た妹紅に至っては食べ始めるや否や不機嫌であった事も忘れ、嬉々として箸を進めて居る。程無くして全ての皿と茶碗はすっかり空になってしまった。

『「ちそうさまでした」』

「ああ、お粗末様でした」

「さて、と」

満足そうに慧音は笑みを浮かべる。少しして妹紅がゆっくりと立ち上がり、それに気付いた翔太郎も、顔を上げた。妹紅は既に居間の襖を開けてこちらを振り返る姿勢でその気配に応える。

「これから呉服屋の娘さんを永遠亭まで案内するから、私はもう行く」

「それなら、翔太郎さん。一緒に付いて行ってやってもらえるか？」

「ちよ、慧音！？なんで…っ」

妹紅は不服さ全開といった風に慧音に異議を申し立てる。しかし慧音は腕を組み、真剣な、教育者然とした眼差しで妹紅を見据えた。

「またドーパントが出るかもしれないだろ」

「私一人だつて倒せるわよ！」

「だが、それは一対一の話だろう？もしも相手が呉服屋の娘さんを狙ったらお前は守りながら倒せるのか？」

ぐ、っと妹紅は口を噤む。何かを守りながら敵を倒すという事は決して容易な事では無い。それは個人の實力とは関係無く、難しいのだ。

風都でドーパントから人々を守り戦つて来た翔太郎もまた、それを知っていた。

「…わかった。慧音が言うなら」

こうして、翔太郎は妹紅の竹林の護衛に同伴する事となった。

### 迷いの竹林

その名の通り、深い霧と山の傾斜のせいで斜めに成長した竹のせいで、迷い込んだものの方向感覚を狂わせてしまうその広大な竹林。その奥深くに、“永遠亭”はあるそうだ。そこにはあらゆる薬を精製出来る医師が居るらしく、その薬を求めて人々が度々足を運ぶらしい。そして彼らの護衛を引き受けるのが、妹紅というわけだ。

「なあ、何でこんなところに隠れ住んでたんだよ？人里に住めば良いだろ」

「あんたには関係ない、というか…慧音もそんな事教えなくて良いのに」

道中、ふと気になった事を翔太郎は尋ねた。迷いない足取りで歩く先頭の妹紅は振り返りもせずには答える。さつきからずっとこうだ。嫌われたもんだなとぼやきながら翔太郎は大袈裟に肩を竦めた。

「あはは…」

それを苦笑して見守るのは今回護衛の対象となっている呉服屋の娘、名は桜と言うらしく妹紅とは親しいのか明るく話していた。一緒に店を営む母が貧血気味らしく、薬を定期的に処方してもらって居るのだと翔太郎は聞いた。

それから他愛の無い会話 専ら翔太郎が外の世界について聞かれた事を答えていた を続けている内に妹紅からもうそろそろ到着だと妹紅が告げる。とはいえ翔太郎達の目に映るのは先程から何ら変わらない一面竹で埋め尽くされた光景であり、それでももう一息なのだとして力を入れた時だった。

《TRICERATOPS!》

ガイアメモリが内包された地球の記憶を起動する時の、ガイアウイスパーが聞こえた。それを聞いた翔太郎が桜を庇うように身構える。妹紅にも聞こえていたらしく、辺りに鋭い視線を寄越す。

「そこかッ！」

妹紅の右手から弾幕が発せられる。竹林の一部が爆煙に霞む。しかし、それを押し退けながら紫色の影が凄まじい速度で突進して来



た。弾幕を撥ね除けるその姿に面食らった妹紅はその判断を一瞬鈍らせた。

「ぐあ!？」

妹紅の身体が掻き消えるように視界から失せた。正確には手にしている棍棒に薙払われたのだ。

「藤原！」

竹に受け止められたのか、そのまま背を預け地面に蹲る妹紅の右腕は、肘と手首の間であらぬ方向に曲がっていた。僅かに突き出た骨が皮膚を破り血を流している。今の一撃を受けたせいだろう、翔太郎は駆け寄りたい衝動に駆られるが動けない。何しろ背後に桜がいる。翔太郎が動いては彼女が無事では済まない。

「大丈夫：ッそれより前!!」

妹紅の声に翔太郎は桜を抱え振り下ろされた棍棒を掻い潜り、懐からロストドライバーを取り出した。腰を抜かして動けない桜、そして負傷した妹紅、二人を守りながら戦えるか。翔太郎の胸には不安が去来した。

「今度はトライセラトップス…こいつも俺達が戦ったドーパントじやねえか…」

《JOKER!》

それでも、とガイアメモリを起動し、ベルトのスロットに装填した。迷う暇など与えられていない。翔太郎はすぐさまスロットを傾

けて、宣言した。仮面ライダーは、誰かを守る為にある。

「変身！」

《JOKER!》

翔太郎の腹部に“J”の刻印が浮かび上がり、その姿は竜巻を帯びて寄り集まって来た黒い装甲に覆われてゆく。頭部までが異形の姿に変貌すると、目の位置の赤い複眼がぎらりと薄暗い竹林で輝いた。

「藤原！桜ちゃんと逃げろ！」

妹紅は激痛に霞む視界の中、“仮面ライダー”と名乗った黒いドーパントが紫色の、自分を吹き飛ばしたドーパントに飛び掛かって殴り付けるのを見ながら立ち上がり、桜に駆け寄り無事な方の腕を差し出す。

「桜！」

「も、ごう…さん」

無理矢理立ち上がらせた桜を引っ張り、妹紅は駆け出した。今は、彼女を永遠亭に匿うのが第一だ。この身体など、幾らでも何とかかなる。勝てなくても負ける事はない。

しかし弾幕を受けてびくともしなかつたドーパントに、否、一度退けたからといって油断した自分への自責が募る。翔太郎がいなければ、桜は今ごろどうなっていたか分からない。

「くそッ…」

吐き捨てながら、妹紅は駆けた。足手纏いにならないように、その事がただ悔しかった。

## #5 襲撃者T / 新たなる脅威（後書き）

次回・東方黒切札

「仮面ライダーメタル…ハードに行くぜ？」

「うどんげ、騒がしいわね？どうしたの…あら」

「……藤、原」

これで決まりだ…！

些細な事ですが、前書きは探偵して無いためこれからは、これま  
での〜に統一したいと思います。一応ご了承下さいませ

## #6 襲撃者T / 妹紅の炎（前書き）

これまでの東方黒切札は！

「じゃああなたがなつたあれもドーパントって訳」

「今度はトライセラトップス…俺たちが戦ったドーパントばかりじゃねえか」

「藤原！桜ちゃんと逃げろ！」

## #6 襲撃者T / 妹紅の炎

### #6 襲撃者T / 妹紅の炎

轟、と唸りをあげて棍棒が仮面ライダーの頭部があつた場所を通り過ぎる。上体をスウェーバックさせて一撃を躲した翔太郎は素早く二発三発と拳を叩き込むが、構わず上段から大振りの一撃が来る。咄嗟に横に転がりその攻撃を回避して、更に回し蹴りを放つが振り下ろしから振り上げへとシフトした攻撃がそれを相殺した。

仮面ライダーは徒手空拳で戦っているのに対し、紫色の体躯の怪人、トライセラトップス・ドーパントはリーチのある棍棒と掌から放つ光弾を武器にしている。拳打や蹴打の間合いに入るよりも先に先手を許してしまう。

「ちっ… だったらこいつだ」

《METAL!》

翔太郎は、ベルトバックルのスロットを元の位置に戻してから黒いジョーカーメモ리를引き抜くと代わりに取り出した灰色のガイアメモ리를起動させる。

《METAL!》

それをスロットに装填し、飛んで来た光の弾丸を身体を捻り、竹を目眩ましに避けながら再び傾けると仮面ライダーの腹部に“M”の刻印が浮かび上がり、身体の真中から左右にその色を黒から銀に変えた。

この姿こそ鋼のごとき剛性を持つ鉄壁の戦士、闘士の記憶を宿し

た“メタルメモリ”にて翔太郎が変身した姿。

「仮面ライダーメタル…ハードに行くぜ？」

「ゼエ…ゼエ…っはあ」

「妹紅さん…腕が」

「へい、き…っ！」

妹紅は右腕の痛みにととうとう荒い息を上げながら膝を突いた。永遠亭は直ぐそこだ、こんな所で立ち止まれない。

桜も息を切らしている。妹紅はゆっくりと立ち上がり決して離さないでいた桜の手を改めて握りながら歩き出した。歪に曲がった右腕からは夥しい量の血が流れていて絶えず妹紅の意識を奪おうと熱を帯びた激痛を訴えて来る。

見縊っていた。これ程までの深手を負わされるなんて、と妹紅は内心の苛立ちを堪える。

幾ら“彼女”と殺し合いをしているからとはいえ、それ以外の平和な日常と“弾幕ごっこ”という殺し合いとは掛け離れた平和的な決闘形式に慣れ親しんでいた妹紅はあの瞬間確かに油断をした。並の妖怪よりは強い自負があった。ドーパントなんてちよつと手強い妖怪程度の認識だった。その結果がこれだ。ぎり、と妹紅は歯を食いしばり一歩一歩と進む。

「ついた…」

漸く二人の前に永遠亭がその姿を表した。その堂々たる屋敷の戸を、体当たりするかのように乱暴に叩く。

ややあつて出て来た兎の耳を持つ藤色の髪の少女は来客を見て目を丸くさせる。玄関先にはおろおろした少女、そして右腕がぼろぼろとなった藤原妹紅が居たからだ。

「はい、どちら様…って！妹紅!？」

「この子、の護衛で来た…薬を渡してあげて…？」

「いや、どう見ても患者は貴方じゃ」

「うどんげ、騒がしいわね？どうしたの…あら」

そこに新たな声が掛かる、中から現れたのは美しい銀髪の女性、赤と青の左右非対称な色合いの服を着たその姿はどこか看護師に見えるもなく無い。彼女こそがこの永遠亭で医師兼薬師を勤める八意永琳、そして先に現れたのはその助手の鈴仙・優曇華院・イナバだった。

（少女治療中）

「これで良いわ、良く我慢したわね」



「普通の人間ならショック死しかねない事をやっというて何を白々しい……」

「普通じゃないでしょう？あなたも、私も」

妹紅は矯正された右腕に竹の添え木をし、包帯で首から吊っている。永琳の言葉に対するその表情はどこか面白くなさそうだ。彼女はやおら立ち上がった。

「あら、もう行くの？」

「後で桜を迎えに来る」

「そう、あの呉服屋の子には薬を持たせて置くわ」

短く礼を述べて、永遠亭を出た妹紅は走り出した。その目にはもはや油断や慢心などある筈も無く。自分達を助けてくれたあの黒い戦士を助け、怪物を倒すという決意だけが宿っていた。その想いに答える様に妹紅は背中に広がった炎の翼にて空を駆けていった。

「メタルシャフト、こいつは効くぜ？」

左手首にスナップを効かせて見栄を切ると、翔太郎は背中に背負

う棍のような武器を構えた。仮面ライダーメタル専用の武器、“メタルシャフト”である。シャフトを大仰に回転させた仮面ライダーは次々飛んで来る光弾を弾き返ししながら間合いに入り、横薙ぎに振るい脇腹を激しく打ち据えた。

「うおらアツ！」

更に振るわれた棍棒を跳ね上げるようにシャフトで打ち返し、力の反動で大きく体が開いた所に強烈に突き込んだ。火花を散らしながらトライセラトップス・ドーパントが地面に転がる。

苦し紛れに乱れ撃ちされた光の弾幕。しかしそれを受けてなお仮面ライダーは小揺るぎもせず竹林を駆け抜け間合いを詰めてゆく。メタルメモリによって驚異的な防御力を手にした形態である仮面ライダーメタルはさしずめ城壁のような堅牢さに物を言わせるパワーファイターだ。

トライセラトップス・ドーパントが立ち上がる頃にはメタルシャフトの間合いまで踏み込んでいた。シャフトが斜めから振り上げられる。メモリの怪人はそれを受け、棒術戦が展開される。三合四合と打ち合う、鈍い金属音が静かな竹林を支配するようだった。大きな音を立て一際激しく両者の得物がぶつかり拮抗する。しかしそれも一瞬だった。仮面ライダーは右拳を振り抜き、トライセラトップス・ドーパントは至近距離で光弾を乱射する。

拮抗していた両者ともが吹き飛び、単純な火力の違いから仮面ライダーの方が僅かに立ち上がるのが遅れた。

そこに棍棒が振り下ろされ、翔太郎は反射的にメタルシャフトを掲げてそれを防ぐ。

「…んのやるおっ…うお！？」

立ち上がった姿勢から振り下ろされた棍棒は体重が乗っている。膝立ちのまま押し返そうと踏ん張るが翔太郎の変身する姿は基本的に以前相棒と共に変身していた時に比べ半分程度の力しか発揮できない。がら空きになっていた胴を蹴り飛ばされて仮面ライダーは地面を滑る。

「…お前、そのメモリをどこで手に入れた！」

立ち上がり、メタルシャフトを構え直すと再び距離を詰める。互いが決定的な一撃を与えられずにいる中、再び鏢競り合いになりながら翔太郎は言葉を投げ掛けた。

しかし答えは返ってこない。だんまりかよ、と呟くと腹に力を込めて棍棒を押し返す。乱れた息を整えながら翔太郎は飛んで来た光弾を躲し、距離を取る。

『……………て』

「？」

トライセラトップス・ドーパントが何か言った気がして翔太郎は構えを解いた。紫色の体躯はだらりと棍棒を持つ右手を下げそして今度こそ、はつきりと言葉を紡ぎ出した。

『たす…け、て…！』

ハッとして、思考が止まる。翔太郎がその距離を存分に詰められたと気付いたのは、激しく棍棒で殴り倒された後だった。強い剛性を持つ仮面ライダーの外骨格を突き抜けて翔太郎の肉体にダメージが入る。頭部を揺さぶられたせいで平衡感覚を保て無くなった翔太郎は立ち上がれなくなってしまった。許容ダメージを超えた一撃に、

仮面ライダーの装甲が風に乗って翔太郎から剥がれ落ちてゆく。

助けて。

目の前のドーパントにされた誰かは確かにそう言ったのだ。翔太郎は混乱する。今まで彼が出会って来たメモリの使用者は我欲、復讐、そういったものに駆られた者が殆どだった。だから、翔太郎の心に動揺が生まれてしまったのだ。

「…お、おおお！」

立ち上がってくれ。力に吞まれ、泣いている誰かが目の前にいるのだとしたら。その誰かに手を伸ばすのが仮面ライダーの役目なのだから。

何度も唱える。しかし無情にも翔太郎の手足には思うように力が入らない。

歩み寄ったトライセラトップス・ドーパントがゆっくりと棍棒を振り上げる。

畜生…！俺は、こんな所で死ぬ訳にはいかねえんだ！

しかし翔太郎の身体目掛けて棍棒が振り下ろされる、やけにスロウに見えるそれを前にして、思わず目を閉じた。

「ああああっ！！」

しかし、次の瞬間聞こえて来た雄叫びに目を開けると。炎を右足に纏わせ、背中には同じく紅蓮の翼を揺らめかせた藤原妹紅がドーパントの顔面を見事に捉え、吹き飛ばしていた。その顔は脂汗が浮かび肩が大きく上下している。

腕はきちんとした方向に治り、首から包帯で吊っていた。その姿に翔太郎は呆然と呟く。

「……藤、原」

「桜はちゃんと永遠亭まで逃がせた。翔太郎：あんたのおかげ。：あと、怪物呼ばわりして悪かった」

妹紅の手を借り漸く立ち上がる事が出来た翔太郎を振り向きもせず、妹紅は言った。それは無愛想ながらも、彼女なりの精一杯の感謝と謝罪の気持ち。一瞬虚を突かれた翔太郎はしかし、すぐにそれに気付くと笑みを浮かべながらハットを深く被り直し、並び立つ。

「ハードボイルドってのは終わった事は水に：いや、風に流すもんさ」

「なにそれ」

気障つたらしく言って、翔太郎は再びジョーカーメモリをベルトにセットし、今度はしっかりとポーズを決めながら、仮面ライダーに変身した。妹紅は笑いながらもんぺのポケットから取り出した札を構える。

翔太郎もダメージは抜け切っていない。妹紅とて負傷した右腕は、竹を使い添え木をしており万全とは言えない。

故に、次で決める。

二人は容易く同じ考えに辿り着いた。吹き飛ばされたトライセラトップス・ドーパントはゆらりと身体を起こし、棍棒を構えて突っ込んで来る。

「これで…」

「決まりだ！」

《JOKER！MAXIMUM - DRIVE！》

「ライダーパンチ！」

「不死“火の鳥 - 鳳翼天翔 - ”！！」

マキシマムスロットにメモリを装填した翔太郎が迎え撃つように右手に紫色のエネルギーを集中させながら走り、その背後、空中へ浮かんだ妹紅が発動させたスペルカードが火炎の鳥を出現させて、仮面ライダーに追いつくとその体を包み加速させる。

妹紅の力を受け、紅蓮と紫の炎を纏った仮面ライダーの拳は、振り下ろされた棍棒を砕くとその勢いのままトライセラトップスの胸部を激しく打ち抜いた。

激しく火花を散らしながら吹き飛んだドーパントはマキシマムドライブと妖力を受け、ややあつて大爆発を起こす。爆心には、細身の女性が立っていて、その身体から吐き出されたガイアメモリが音を立てて砕けるのと同時に、彼女自身もその場に倒れ気を失ってしまった。変身を解除した翔太郎は、竹に背を預け座り込むと、大きく息を吐いた。

「あの女、なんでドーパントになんか…？」

「……分からねえ。だがどうやら、彼女は自分でメモリを使った訳じゃなさそうだぜ……」

ゆっくりと、寄り掛かっていた竹から身体を離し女性を担ぎ上げ

た。ガイアメモリを破壊された事で彼女は一時的な昏睡状態に陥っている。それは別に、命に関わるものではないが無視出来るものではないし妖怪に襲われなくても限らない。

「聞きたい事はまだあるけど、後回ししてとこか。じゃあ案内するから、ついて来て」

あまり状況を把握出来ていない妹紅だったが肩を竦めると、翔太郎を追い越した妹紅は彼と連れ立って永遠亭に向かって行った。

## #6 襲撃者T / 妹紅の炎（後書き）

次回・東方黒切札

「バイク…聞いた事あるな、外の世界の乗り物でしょ？」

「そんなことねえ…俺は一人で踏ん張ってるだけさ」

「さあ…振り切るぜ！」

これで決まりだ…！



#7 動き出すD / 彼は一人(前書き)

これまでの東方黒切札は！

「これで…」

「決まりだ！」

「ライダーパンチ！」

「不死“火の鳥 - 鳳翼天翔 - ”！！！」

## #7 動き出すD / 彼は一人

#7 動き出すD / 彼は一人

「永琳、世話になったわ」

「ええ。お大事にね、といっても貴女は大丈夫だろうけど」

迷いの竹林での戦闘の後、日本の古き伝統を残したような和風の屋敷・永遠亭で目を覚ました翔太郎と妹紅、薬を処方して貰った桜は、左右非対象の色の服を着た銀髪の美女、八意永琳に見送られ迷いの竹林を後にした。ドーパントになっていた女性はまだ昏睡していることから永琳に一度任せる事になっている。

「<sup>ダブル</sup>Wみたいな服だったな、あの医者…」

「は？」

「いや、なんでもねえ。それより、腕は良いのかよ？どう考えても暫く安静だろ」

「私は平気。一日二日寝れば治るから」

「一日二日って…幻想郷じゃ傷の治りまで早いのか？」

「そういう訳じゃないけど…まあ、傷が治りやすい体質なんだ」

何となく釈然としないながらも翔太郎はそれ以上の追及を諦め口

を閉ざす。漸く人里に戻って来た時には既に日が沈み掛けていた。

「妹紅さん、左さん、有り難う御座いました！」

「気にしないで。それじゃあおかみさんによろしく」

手を振る桜に妹紅は手を軽く振り返し、翔太郎も被ったハットの鍔に軽く触れながら会釈して別れ、上白沢邸に辿り着いた翔太郎達は、玄関先に慧音が立っているのを見た。そして、彼女が先程から怪しげに睨んでいるものに心当たりがあつたのは、翔太郎だけだった。黒と緑のツートンカラーに前後の黒い車輪、鉄の馬とも言えるそれは間違いなく、翔太郎の愛車“ハードボイルダー”だった。

「ああーッ!？」

「さっきまでこんなモノは無かつたし…紫殿の仕業か…ん？翔太郎さんと妹紅じゃないか」

目をひん剥き、顎は外れんばかりに開いて思わずハードボイルダーを指差して叫んだ翔太郎の声に怪訝そうに首を捻っていた慧音がこちらに気付くと、二人は駆け寄って来た。それを見て慧音は声をかける。

「間違いねえ…俺のバイクじゃねえか！」

「バイク…、確か外の世界の乗り物でしょ？」

追いついて来た妹紅がしたり顔で口を挟む。翔太郎は何故自分の愛車が此所にあるのかを全く理解出来ないでいた。自分と同じようにこの世界迷い込んでしまったのだろうか。だとしたら、何故なの

だろう。

「それはそうと、二人ともボロボロじゃないか？何があつたんだ？」

慧音の言葉に顔を見合わせた翔太郎と妹紅は、そろって腹を鳴らした。二人とも死力を尽くし戦つたのだから無理は無い。慧音はきよとんとしながらも、二人を連れて家の中に入って行つた

少女・探偵食事中

「そうか、またドーパントが…。しかも翔太郎さんが外の世界で戦つたような我欲に塗れた悪党じゃなく、ただの一般人だつた…」

「ああ。推測だが、どこかにいるはずだぜ…：ガイアメモリを人に無理矢理使わせてる奴がな」

「でも、何だつてそんな事を？」

翔太郎と妹紅は用意された晩ご飯を、行儀が悪いと叱られながらもひとしきり掻き込むと、二杯目をおかわりした辺りで漸く落ち着いてきた。妹紅は意図を図りかねると首を捻った。翔太郎も言い淀む。そもそも、そんな奴が存在するのかどうかすら確かでは無いのだ。

「さあ…。ただ、ろくでもない目的には違いねえ」

しかし、そうでもなければ説明が付かない。ガイアメモリはコネ

クタを身体の何処かに移植する処置とセットで始めて使用出来る。幻想郷の人間がコネクタ処置を出来る可能性は低い、つまりその用途を知る者が何処かにいる可能性が高いという事だ。

「取りあえず、この事は博麗の巫女に教えるべきだろうな。弾幕の効き辛い敵もいることを教えないと」

「なら、それは俺が引き受けるぜ。“足”もあることだしな。慧音さんは寺子屋があるし、人里を守らないとな」

「翔太郎一人じゃ心配だな。だったら私が」

「いや、藤原も残れ。まだ怪我が治り切ってないだろ。それにお前ならドーパントとやりあえる」

翔太郎が自らを指差して言った。慧音は寺子屋の教師であり、人里の守護者でもある為に残らなければならない。代わりにと妹紅が手を上げるが翔太郎はそれにも首を横に振った。妹紅の戦闘力は里の退治屋や慧音と比べても高い、自分が不在の場合でもドーパントと渡り合える戦力を削る訳にはいかない。

明日、翔太郎は一人ですぐ博麗神社に足を運ぶ事に決定した。

「…ところで、昼間とは見違えるくらい仲良くなったな？」

「ぶっ！」

「きつたねえ!？」

慧音の指摘に妹紅は盛大にお茶を噴いた。翔太郎が泡を食ったように体を捻り吹き出されたお茶を避けながら声を上げる。妹紅は要

領を得ない言い訳を連ね始め、慧音はからかいながらもそれを羨ましそうに聞いている事には誰も、本人すら気付いていなかった。

「まさか、こんな所でドーパントに出くわすなんてな。…それでもここで知らん振りなんてのは、出来ねえ。…そうだろ、フィリッ  
プ」

食事を終え、その片付けが終わわり翔太郎は風呂から上がった縁側に座っていた。以前手伝いをした時にお礼で呉服屋のお女将さん、桜の母からもらった黒地の浴衣の隙間から入り込む夜風が心地良いもともとそう長くない滞在になるはずだった。しかしガイアメモリがこちらの世界に流れ込んで来てしまったのなら、風都ではないからといって見て見ぬ振りをする訳にはいかないだろう。

慧音や妹紅、里の人達とはここ一週間弱で知り合っただけ過ぎない仲だ。それでも、翔太郎には十分過ぎる時間だったと言える。風の中で確かに相棒が頷いてくれたような気がした。

「翔太郎さん」

暫くそうして風都ではあまり拝む事の出来ない星空を眺めていると、声がした。そちらを振り向くと湯上りなのだろう、長い髪を纏め上げ、薄い青地の浴衣に身を包んだ慧音が立っていて、律義に隣良いか？などと聞きながら座った。隣に座る慧音からは石鹸の良い香りがほのかに漂い、翔太郎はどこか落ち着き無い様子で佇まい

を直した。

「申し訳ない」

「え？」

出し抜けに謝られて翔太郎は間抜けな声を上げてしまった。彼女が詫びる事などない筈だ。少しだけ首を捻ったが翔太郎はそこで一つの可能性に行き当たる。

「ドーパントの事なら気にすんな。巻き込まれたなんて思っちゃいねえよ」

「む、しかし…」

どうやら正解だったらしい。翔太郎は食い下がる慧音に掌を向け、その言葉を遮りながら言った。

「ここが俺のいたのとは違う世界でも、そこに暮らす人達を泣かせる奴がいるなら、止めるさ。…仮面ライダーだしな」

「仮面、ライダー」

聞き慣れない単語を反芻する。そう言えば、初めてドーパントと戦った時も、翔太郎はそう名乗っていた。きつとその名は、彼の戦う心の支えなのだろう。

「強いな、翔太郎さんは」

「そんなことねえ、俺は…一人で踏ん張ってるだけさ」

そう言って笑った翔太郎の横顔はどこか寂しそうで、辛そうで。慧音は掛ける言葉を見失った。一人で踏ん張っている、その悲しみを仮面の中に隠して翔太郎は人々を守って来たのだろうか。

「さあて、そろそろ寝ようぜ？明日もあるしな」

短い沈黙を翔太郎自身が口を開き、立ち上がる事で破った。慧音は無意識に伸ばし掛けていた己の腕を慌てて引っ込める。

「あ…ああ、おやすみ」

そう言って、ひらひらと手を振る彼の後ろ姿を見送る事しか出来ない自分に歯がゆさを覚えながら。部屋の中に入り見えなくなるまでじっと見ていた。

「一人で踏ん張ってる、か…」

やがて翔太郎の姿が部屋の中に消えると、そんな眩きが思わず零れた。それは自分以外誰もいなくなった上白沢邸の縁側に小さく残り、やがては心地の良い夜風に溶けていった。

風都、その外れにある廃棄された研究所。ここもまた、財団Xが風都から去ったあと、発見された施設の一つだった。以前は運び込



まれたガイアメモリの試験運用を行うためだったものらしい。

照井竜はそこに訪れていた。休暇を利用した個人的な調査だ。以前手に入れた“ボーダー”のメモリについての資料。刑事の勘とでもいうのか、照井はそれにこれを辿れば翔太郎を見つけ手掛かりが手に入るのではないかという奇妙な確信を持っていた。

「ここがそうか…」

真紅の愛車“ディアブロッサ”から降りると慎重に、今は使われていないその施設へ足を踏み入れた。セキュリティなどの類は全て機能を失っているらしく、その歩みを阻むものは見当たらなかった。資料によれば、“ボーダー”のメモリはこの施設に運ばれた後に、実験されるはずだったようだ。

資料内容と、その名を考えるならば“境界の記憶”を有したそのガイアメモリは、次元の境界を行き来する事が出来る力を持つ。その力に巻き込まれた翔太郎は、もしかしたらどこか風都とは別の場所に飛ばされたのではないか。照井自身も荒唐無稽だと思うこの考えくらいしか、余りにも忽然と消えた翔太郎の足取りを説明する事は、難しかった。

そんな折に、照井は人の気配と足音を察知し、身構える。すると程無くして何人かの黒服の男達が歩いて来るのが辛うじて生きている蛍光灯とその光とで見えた。

「おや、見慣れないお客だな」

照井は警察証を突き出しながら表情を険しくした。こんな所にいるならば自然とその素姓は限られる。いずれにせよ法に触れているが、“ミュージアム”や“財団X”の残党ならば、それは意味を成さない。

「風都署だ。ここで何をしている」

すると数人いる内の、灰色のジャケットを着た男が歩み出て来た。リーダー格と見ていいのだろう。彼は警察証を見てもその余裕を全く崩さずに笑った。

「これはこれは、街のお巡りさんが来るなんてな。ここに来るって事はさては“ボーダー”のメモリが目当てかな？」

「……」

照井の沈黙を肯定と受け取った男は、朗らかに笑いながら続けた。

「当たりつてとこか。まあ、そうだろうな。じゃなきゃこんなところには来ないよな…だが」

《MASQUERADE!》

言葉が区切られたのを合図に後ろに控えていた男達は揃って懐からガイアメモリを取り出しそのスタートアップスイッチを押した。複数のガイアウィスパーが鳴り響き、彼らの姿は一樣に歪な骸骨の様な頭部を持つ“マスカレイド・ドーパント”へと変化した。

「ここにはもうアレは無いぜ。あれが一番効力を発揮する場所、そこに移したからな。どこで知ったかは知らないが、計画の障害になりうる奴には…悪いが死んでもらう」

「やはり組織が関わっていたか…！」

照井はすかさずバイクのハンドルをそのまま引き抜いて来た様な

デバイス、“アクセルドライバー”を取り出し、腰にあてがった。銀色の帯が伸び、ベルトになったそれを装着しながら更に照井は真紅のガイアメモリを取り出す。

《ACCEL!》

「変……身ッ!!」

《ACCEL!》

中心部のスロットにアクセルメモリを叩き込み、アクセルドライバーのハンドルを思い切り捻る。スピードメーターが振り切れ、エンジンの唸るような音と共に彼の身体が周囲に浮かび上がった赤い光に包まれ、その体は真紅の鎧へと包まれて行く。そしてオンロードバイクのヘルメットのような仮面が銀色のアンテナを輝かせ、全身の鮮やかな赤とは対照的な青いバイザーが輝き、暗がりの中を照らした。

「さあ、振り切るぜ…」

自らの憎悪を振り切り、風都を守った不死身の戦士。“仮面ライダーアクセル”がその場に姿を表すと、複数のマスカレイド・ドールパント達に向かって行った。

## #7 動き出すD / 彼は一人(後書き)

次回・東方黒切札

「そのなりは…外来人だね？生憎、霊夢は今出払ってる」

「私は霧雨魔理沙。紅魔館までの道案内、引き受けてやるぜ」

『我々の計画の邪魔はしないで貰おうか…、諸君？』

これで決まりだ…！

## #8 動き出すD / 恋色の魔法 (前書き)

これまでの東方黒切札は！

「これはこれは、街のお巡りさんが来るなんてな。ここに来るって事はさては“ボーダー”のメモリが目当てかな？」

「変……身ッ！…！」

「さあ、振り切るぜ…！」

## # 8 動き出すD / 恋色の魔法

### # 8 動き出すD / 恋色の魔法

次の日の早朝、ハードボイルダーを駆り博麗神社に向け出発した翔太郎は、人里の人々が起き出し朝の仕事に就く時間には博麗神社前の石段を上り切っていた。

朝日に輝く静かな境内を見渡しながら、社殿に向け足を進める。丁度賽銭箱の前辺りまで来て、翔太郎は足を止めた。少女の声はどこからか聞こえて来たからだ。

「おや、見ない顔だねえ」

振り返る、しかしあるのはくぐって来た赤い鳥居が立っているだけ。そこには誰も居なかった。

「こつちこつち」

今度は明確に声がどこから発せられたのか分かる。頭上だ。上を向く、と神社の屋根に腰掛けこちらを見下ろす少女と目が合った。彼女は明るい小麦色の髪を揺らしながらにかつと快活に笑顔を作り、掛け声と一緒に翔太郎の前に降り立った。背は小さい。さながら子供だが、その頭部から生える二本の角が彼女が妖怪であると主張していた。

「そのなりは… 外来人だね？ 生憎、霊夢は今出払ってる」

「ああ、いや。元の世界に帰る為に来たわけじゃない」

その言葉に角の少女はキョトンとなった。無理も無いだろう。慧音の話では博麗神社に行くのは幻想郷から脱出する為の数少ない手段だ。外来人がそれ以外の用事で来る事などまず無いらしい。

「へえ、すると…何の用だい？」

「その霊夢に伝えなきゃならない事があるんだ。今回の異変の事で」「訳ありつてな感じだね。かく言う私も聞き及んじやいるさ、弾幕ごつこのルールに従わない怪物の事は。霊夢はそれを調べに紅魔館に行ったよ。あそこには大きな図書館がある」

「紅魔館…」

翔太郎はその名前に聞き覚えがあった。妖怪の山の麓、そこにある“霧の湖”の中の島に位置する、吸血鬼の住まう深紅の館。それこそが紅魔館であり、余程の事がない限り翔太郎には縁が無い場所だと慧音が言っていた名だ。

「みたところ、あんたは戦いを経験してるみたいだが、人間があそこの住人とは事を荒立てないのが懸命だよ。まあ、そんな命知らずは早々居ないだろうが…」

「おーい霊夢ーッ！いるかー!？」

角の少女の言葉が切れるより早く、上空から声が振って来た。翔太郎と少女は同じタイミングで空を見上げた。青い空に黒と白の影が見える、と急速に近付いて来たそれは跨がっていた筈から飛び降りて境内に降り立った。

金髪の少女だ。いかにも魔法使いだと言いたげな分かりやすい服装に身を包んだ少女はこれまた分かりやすい尖んがり帽子の位置を直しながら角の少女に歩み寄る。

「萃香、霊夢は中か？」

「うんにゃ、しかし今日は霊夢の客が多いねえ」

「どういう意味なんだぜ…って、見掛けない顔だな。お前誰だ？」

角の少女　伊吹萃香が指を指した方を辿りそこで初めて気付いたとばかりに白黒の少女は翔太郎を見て首を傾げた。あまり悪びれていないあたり本当に気がつかなかつたのだろう。

「俺は左翔太郎…人呼んでハードボイルド探偵さ」

気を取り直すと大層気障ったらしくハットの鍰に指を添わせながら言い放つ翔太郎だったが、白黒の少女はピンと来ないように一言「変な奴だぜ」と呟いて、再び萃香に向き直る。

「あらかた外来人だろ。で、霊夢は？」

「紅魔館だよ。今回の異変について図書館に調べに行ったらしい」

「例の怪物か、弾幕ごっこに従わないなんて不作法な妖怪もいたもんだぜ…」

「やれやれと白黒の少女は肩を竦めて言った。そこで萃香は妙案得たりとばかりに笑みを浮かべた。」



「丁度いい、魔理沙。あんたどうせ紅魔館に行くんだろ？なら、翔太郎だったか。こいつを道案内してやりなよ。行きたがってるみたいだし」

「おいおい、何だって私がそんな事…お前もお前だ、あそこに行くなんて正気の人間がやる事じゃ無いぜ？」

「良いじゃないか、な？」

結局渋っていた白黒の少女、魔理沙は溜め息を吐いて帽子を深く被り直した。萃香はそれを見ながら満足そうな笑みを見せる。

「分かった分かった、ったく物好きな人間も居たもんだぜ…ってか萃香、そもそもお前が連れて行けば良いだろ」

「私は、ほら。これがあるから」

そう言っつて詰め寄られた萃香は自分の腰に括り付けてある瓢箪を掲げながらちゃぷちゃぷと揺らして見せた。いつの間に呑んだのだろっ、心なしか酒臭い。

「…お前の能力、“酒を飲む程度の能力”で良いんじゃないか？」

魔理沙はげんなりしたように半眼で萃香を睨む。しかし当の酒飲み妖怪は、意に介した様子も無くがぶがぶと酒を浴びるように飲んで居る。そしてぶはあっ！と何とも親父臭く口を拭い、「それも悪くないねえ」などと宣った。

「嫌味のつもりだったんだけどな…まあ良いや。ええと、翔太郎？だったか、私は霧雨魔理沙。紅魔館までの道案内、引き受けてやる

ぜ」

「助かる。それじゃあ早速……」

「……敵が来る」

《HOPPER!》

改めて名乗った魔理沙に礼を述べ、漸く傍観していた翔太郎が口を開くのと、萃香が低く鋭く呟いた言葉が聞こえるタイミング、そしてガイアメモリの“起動音”ガイアウイスパーが境内に鳴り響いたのはほぼ同時だった。

「上だ！」

翔太郎は咄嗟に魔理沙を庇いながら横っ飛びに倒れた。萃香はというと既にバックステップで近くの木に飛び移っている。土煙から現れたのは、蝗虫を模した頭部に虫のような暗寒色の奇妙な関節を持つ体躯。上空から石畳を踏み抜いて砕いた跳躍力を見せたそいつは蝗虫の記憶を有した“ホッパー・ドーパント”だった。

「こいつが化け物か……食らえ！」

一瞬呆気にとられていた魔理沙は箒に跨がると速やかに上空へ、そして右手を地面に立つ奇怪なバツタ男に向けた。そして、色とりどりの鮮やかな弾幕が飛来する。

ホッパー・ドーパントはろくに身動きも取れずにその姿を弾幕の中に消した。手応えありだ、魔理沙は満足そうに笑みを浮かべる。

しかし、煙の中から飛び上がって来た影がある。虫のような顔が魔

理沙を見据えた。

「しまっ…」

「しゃあっ!」

その右手の鉤爪が、魔理沙の喉元を切り裂く前に、萃香の剛腕がホッパー・ドーパントの顎を捉えた。みしり、と顔があらぬ方を向き、地面に叩き落とす。

「油断禁物、だねえ」

言いながら、萃香は追撃とばかりに地面もろとも破壊する勢いで拳を打ち下ろす。が、それはすんでの所で躲された。

「魔理沙、こいつらは弾幕を使わないだけじゃない。こっちを殺す気で来るよ」

「…へっ、上等。…やってやるぜ!」

萃香の言葉に一瞬だけ息を呑み、しかし体勢を立て直した魔理沙は再び弾幕を放つ。それを躲すホッパー・ドーパントに萃香が肉弾戦を挑む。しかし、単純な力のぶつけ合いでは不利と悟ったホッパー・ドーパントは、執拗に魔理沙を狙い始めた。高度を上げる魔理沙だが、相手の跳躍は屋根や木等を使い毎回魔理沙の高度に侵入してくる。魔理沙はその攻撃を弾幕ごっこで培った身のこなしで、ギリギリ躲し続け、仕損じた爪や蹴り脚は服や肌を掠めて行く。

「ぐ…っ、んのー!」

「どうした！私は狙わないのかい！？」

このままでは魔理沙がいずれやられる。萃香が攻撃を仕掛けるが、回避に徹するばかりで積極的に攻撃しようとはしない。翔太郎はそれを黙って見ていたりはしなかった。ロストドライバーを腰に装着し、ガイアメモリを起動する。

《JOKER!》

「変身」

《JOKER!》

ロストドライバーのメモリスロットにジョーカーメモリを装填、続けて傾けると翔太郎の身体に竜巻が巻き起こり瞬く間に変身を完了させた。仮面ライダー、ジョーカー。翔太郎は地面を駆け、丁度着地した相手の硬直を狙い助走をつけたパンチを見舞った。

突如現れた黒い戦士に魔理沙と、萃香までもがあんぐりと口を開けて絶句する。

「なんだ、ありゃ…」

「なるほど、妖怪や怪人を見てもやけに落ち着いてると思ったらそういふことかい…」

先に立ち直った萃香が、怪人に蹴りを見舞う仮面ライダーを視界に捉えながら納得したように言った。

「やるじゃないか、人間も」

次々と繰り出される蝗虫の怪人の足技は、萃香をもつてしても見事だと認めざるを得ないものだった。しかし、翔太郎はそのほとんどもを捌き、いなしていた。己が“力”を象徴する存在ならば、彼のそれはまさしく“技”を極限まで高めた姿。

「おらぁッ！」

ジョーカーメモリを使い極限までその技術を高めた翔太郎、仮面ライダーはホッパー・ドーパントの蹴り足を潜り抜け、軸となった足を払うように蹴る。仮面ライダーにより軸を奪われ地面にひっくり返った所に萃香が砲弾のように突っ込んで来て、拳を振り下ろすがそれはぎりぎりですでに躲される。

しかし、上空の魔理沙は既に狙いを定めていた。その手には、スperlカードが挟まれている。

「彗星“ブレイジングスター”！」

辺りに、夜空を飾り付けるが如くちりばめられた星のような弾幕が降り注ぎ、ホッパーはその姿を弾幕の中に消した。翔太郎と萃香の攻撃を避ける事に専念するあまり、回避行動が遅れてしまったのだ。今度こそ弾幕によりダメージを負ったホッパー・ドーパントは、その煙が晴れるとやおらその倒れ伏していた身体を起こした。

「ち…私のスペルカードでもくたばらないなんてな。随分しぶとい奴だぜ」

『…ドコダ』

「あ？なんだ、こいつ…喋れるのか？」

魔理沙が不審そうに首を傾げる。ホッパー・ドーパントはもう一度、その嘎れたような声で吠えた。

『ハクレイレイム ハ、ドコダアアア!!』

萃香は眉を潜めた。ホッパー・ドーパントは今確かに博麗霊夢はどこだと言った。つまりこいつは霊夢を付け狙っている。だからこそこの博麗神社に現れたのだろう。だが何故か。幻想郷の結界を維持する彼女はこの世界の人間にも、妖怪にも必要な存在だ。その彼女の命を狙うのは、明らかに異常。

「何だか分からないが、あんたを野放しにすりゃ霊夢がヤバいつて事は分かったぜ…!!」

『ドコダツ!!』

仮面ライダーの拳を避けたホッパー・ドーパントはそのまま魔理沙へと跳躍し突進する。しかしそれを見ながら呟いた彼女の右手に、何かが握られているのが見えた。

「見せてやるよ、私の魔法」

キツとバツタの怪人を睨んだ魔理沙は、右手に構えたミニ八卦炉を突き出す。すると濃密な魔力が収束していくのを萃香の肌が察知し、その腕力で射線上に立つ仮面ライダーを引っ張りあげて離脱する。それを見るや否や、魔理沙は高らかに宣言した。

「恋符“マスターパーク”!!」

眩いばかりの光の束が、魔理沙の構えるミニ八卦炉から照射され、あたかもレーザービームのようなその一撃は、ホッパー・ドーナツを目掛けて伸びて行く。

『グガアアツ！！』

狙い変わらず撃ち出されたマスタースパークは、ホッパー・ドーナツがギリギリのところまで身体を捻り、直撃を躲かされてしまう。それでも十分なダメージを与えたようで、地面へと落下したホッパー・ドーナツは、右半身から煙を上げながらヨロヨロと立ち上がった。するとあるう事が魔理沙達に背を向けると石段を一気に飛び下り逃亡を計る。

『ハクレイレイムウ…ドコダア…！！』

「おい！？待ちやがれ！」

「チツ…あいつ、霊夢がいそうな所を風潰しに探す気だね…」

「だとしたら、人里がやべえな…！」

忌々しげに呟いた萃香の言葉に翔太郎は浮かび上がった可能性に居ても立つてもらえなくなり、ホッパー・ドーナツを追って鳥居を抜け石段を駆け降りようとして、しかし強烈な衝撃を真正面から受けて吹き飛ばされた。

「うおおあツ！？」

「な…！！」

ジョーカーメモリによつて生成された黒い装甲は翔太郎の命を守つたが、砂利の上を転がる仮面ライダーはダメージを殺し切れず、装甲の胸板に深い刀傷を作っていた。ようやく膝を立てて体を起こした翔太郎は吹き飛ばされて来た鳥居のある方を見た。こつ、こつと足音が響き境内に姿を表したのは右手に剣を携えた、青い装甲に身を包む剣士だった。

『我々の計画の邪魔はしないで貰おうか…、諸君？』



# 8 動き出すD / 恋色の魔法（後書き）

次回・東方黒切札

「はは、俺たちやガイアメモリで化け物になるだけが能じゃないんだよ。じゃあな…」

「人間を、なんだと思っでやがる！」

「魔理沙、翔太郎！今の内に行きな！」

これで決まりだ…！

#9 Nの強襲／鬼の鉄拳（前書き）

これまでの東方黒切札は！

「ハクレイレイムハ、ドコダア！！」

「恋符“マスタースパーク”！！」

「だとしたら、人里がやべえな…！！」

## #9 Nの強襲／鬼の鉄拳

#9 Nの強襲／鬼の鉄拳

《ENGINE! MAXIMUM - DRIVE!》

風都 財団X研究所跡

「はあぁッ!」

真紅の仮面ライダー、アクセルの剣が彼を取り囲んでいたマスカレイド・ドーパントを纏めて薙ぎ払った。Aの軌跡を描いた光に切り裂かれ、連鎖して爆発するドーパント達の中から、青いバイザーを輝かせたアクセルが歩み出て来て彼にドーパントをけしかけた男に切っ先を向ける。しかし、男はそれを意に介した様子も無く白々しく拍手をしてみせた。

「流石、風都の仮面ライダーだ。噂に違わぬ強さだな」

「答えてもらうぞ…“ボーダー”のメモリはどこにある」

「さあな？アレは計画の中核も中核。おいそれと教える訳にはいかない」

「ならば貴様を逮捕する」

「出来るかな？」

そういつて男はガイアメモリを取り出した。それを見た照井はエンジンブレードを構える。カチリ、とメモリのスタートアップスイツチが押され、しかし次の瞬間男はそれをアクセル目掛けて投げ付けた。

「何っ?!…うああっ!!」

予想外の行動にアクセルが一瞬動きを止め、次の瞬間メモリが破裂し凄まじい爆発音と炎が巻き起こった。それをまともに受けたアクセルの体は宙を回転しながら廃棄された研究所の壁に叩き付けられる。所々から火花を散らしながら赤い仮面ライダーは力無く床に横たわり、変身が解除されてしまう。仮面ライダーの装甲が吸収し切れなかったダメージを受けた為か、照井は傷だらけとなって地面に倒れたまま動かない。

「はは、俺たちやガイアメモリで化け物になるだけが能じゃないんだよ。じゃあな…」

けらけらと男は笑いながら、去って行った。ガイアメモリ型高性能爆弾が直撃したのだ、仮面ライダーとてひとたまりもない。しかし、男は知らない。倒れ伏した照井竜の右手が、力強く握り拳を作ったことを。

「ナスカ…！園咲のメモリまであんのかよ！？」

信じられない、とばかりに翔太郎は鳥居を背にして立ち塞がる青い剣士を見た。

かつて敵でありながらも、翔太郎と同じく風都を愛していた男が所持していたガイアメモリ。ナスカの記憶を有するメモリで顕現する“ナスカ・ドーパント”が切っ先を仮面ライダーに向けていた。

『あの一瞬で致命傷を避けるとは、流石は“ミュージアム”を壊滅させた仮面ライダーという所か』

「…計画とか言ったな、この世界の人間にメモリを使う事か」

『ほう、流石に察しがいいな。探偵なだけはある』

翔太郎の脳裏に迷いの竹林で戦った、トライセラトップスのメモリを何者かに挿し込まれたであろう女性の姿が浮かぶ。しかし返って来た反応に仮面の下で翔太郎は目を丸くさせた。仮面ライダーの事ばかりで無く翔太郎自身の事まで調べているとは思わなかったからだ。立ち上がりじり、と間合いを計る。ナスカ・ドーパントは切っ先をこちらに向けながら距離を詰めて来た。

『だが、それは計画完遂の為の手段に過ぎないのだよ、いわばモルモットだな』

「てめえ…」

ナスカ・ドーパントの言葉が翔太郎の闘志に、正義感に火を点けた。氣勢を上げながら、仮面ライダーは迎え撃つように駆ける。横薙ぎに、仮面ライダーの首を刎ねようと片刃の剣が迫るがそれを屈

んで躲し、体が開いた隙に拳を叩き込む。出来るだけ多く打ち込み、フィニッシュの一発で距離を離す。両者の間合いが開いた隙に魔理沙が上空から突破を狙うがナスカ・ドーパントが放った光弾の連射に牽制されて失敗に終わる。

「邪魔だぜ！」

《METAL!》

旋回してそれらを回避し終えた魔理沙が弾幕を張る。ナスカはそれを一直線に走って突破し仮面ライダーに迫る。焦る事無く翔太郎はメタルメモリを起動し、ロストドライバーにインサートした。

《METAL!》

闘士の記憶を内包したガイアメモリが起動し、たちまち仮面ライダーは堅牢な銀の装甲に包まれる。翔太郎は瞬く間に剛性に特化した形態仮面ライダーメタルへと姿を変じた。振り下ろされて来たナスカの剣を腕で受け止めながら背中に装着した棍、メタルシャフトを振るいそのまま二、三合と打ち合い金属が噛み合う高らかな音が響く。

「人間を、なんだと思っつてやがる！」

『何とも思っつてはいない。実験動物に特別な感情を抱くかね?』

「ンの野郎…もう頭に来たぜ…！」

腹部に膝が入り、仮面ライダーに隙が生まれた。そこを付け入るような剣撃のラッシュに如何な超剛性の仮面ライダーメタルも後退

を余儀なくされる。しかし、翔太郎は果敢にシャフトを構え直し突進する。大振りのメタルシャフトによる一撃が剣とぶつかりあう度に激しく火花が飛ぶ。

鏝競り合いに持ち込まれ、膠着する。ぎりぎりど力と力がぶつかりあい、両者は一步も動かない。次第に仮面ライダーが押され始める。本来の運用方法とは違いメタルメモリ単体では、その真価を發揮する事は難しいのだ。

(くそつ “ヒートメタル” なら…！)

「ほいよっ！」

その拮抗を崩したのは萃香だ。ひよい、と軽やかに仮面ライダーの背をよじ登り肩から顔を出した萃香の蹴りが、ナスカの顔面を捉え青い体躯がもんどり打って大きく吹っ飛んだ。

『…ッ！ふ、成程。愛らしい風貌だがやはり妖怪は手強いらしい』

「魔理沙、翔太郎！今の内に行きな！」

「悪いな！頼むぜ！」

突進を掛けた萃香が叫ぶ。一瞬だが面食らったナスカが続く萃香の嵐のような拳の乱打を躲している隙に、魔理沙は駄目押しに弾幕をばらまきながら、すんなりと猛スピードで離脱する。それに驚いたのは翔太郎だ。

萃香がいかな強い妖怪とはいえ、以前の“ミュージアム”での幹部級ドーパントを前にして彼女一人を置いて行くのは翔太郎には出来なかった。

「おい、一人じゃ流石に…」

「大丈夫さ、やれる」

剣の腹で拳を弾かれた萃香は衝撃を逃がしながら、ボールのようにくるくると回転し仮面ライダーの隣に着地した。そして切っ先が掠めたのか頬に流れた赤い血を拭いながら不敵に笑った。久々の、強者。その登場に彼女の鬼としての本質が喜び打ち震えているのだらう。

「……」

「疑ってるのかい？それじゃ、良い事を教えただけよう。鬼はね、嘘を吐くのが嫌いだ。どうしてもっていうなら、その内晩酌にでも付き合ってもらおうよ。…さあ、行った行った！」

「…すまねえ！」

翔太郎は快活に笑う鬼の少女に急かされる形で、ナスカへと突進した。それを迎え撃つかの如く剣を構えるナスカ。走りながら、ベルトに装填されていたメタルメモリを引き抜き、メタルシャフトのマキシマムスロットへと挿入する。ガイアメモリの力が極限まで引き出され、メタルシャフトは銀色の稲光を放つ。

それを大きく振りかぶり、仮面ライダーは力一杯シャフトを投げた。それも地面にだ。

「おらアっ！！」

『なっ！？』



ガイアメモリの力を極限まで引きだして行使するマキシマムドライブのエネルギーは制御を離れ、石畳を激しく打ち抜き破碎させた。その爆発により飛礫と煙がナスカに襲いかかる。

《JOKER!》

「お前に構ってる暇はねえんだ。じゃあな！」

翔太郎は再び黒の仮面ライダー、ジョーカーへと転じナスカを飛び越え境内へ向かう階段を駆け降りて行った。

ナスカが剣を一閃し、煙と飛び散った破片を振り払った時には既に仮面ライダーの姿は無かった。追おうと鳥居の方に振り返ろうとして、しかし彼はそうする事が出来なかった。凄まじい闘気、或いは妖気だろうか。それが彼女から目を離す事を許さなかったのだ。目を離せば一瞬で敗北すると錯覚するような、その強い気迫は、鬼の名に恥じぬものだった。

「さあ、悪いけど…ちょいと付き合ってもらおうよ？」

ぐび、と瓢箪の酒を呷った萃香はギラギラとした好戦的な瞳をナスカに向けた。彼女を無視して行くことは諦めたのだろうか、青い怪人剣士も自らの獲物を構える。それを見るや否や、萃香は弾丸のように拳をナスカの腹部にめり込ませていた。

『ガ…!?!』

剣を振る事すら許されなかった。それほどの速度と衝撃にナスカは膝から頽れた。それを見た萃香は肩を竦め、呆れたように溜め息を吐いた。

「いけないねえ、気が散ってるままで私とやり合おうなんて思わない方が良い」

『ッ…小娘が!!』

立ち上がったナスカは地面を疾駆しながら光弾を放つ。しかしそのどれもが、彼女の拳にぶち当たり霧散するのだ。

「無駄無駄ア！」

しかし、それはあくまでも接近する為の手段。思惑に違わず萃香が弾幕を弾くその間に間合いを詰めたナスカは、大上段からその刀を振り下ろす。萃香は、それを掌で受け止めた。無論、鋭い刀は少女の掌など切り裂く事は容易い。しかし、それは剣が文字通り、本当に受け止められてしまった事で驚愕へと変わった。

『な、にイ…!?!』

「まあ驚くのも無理ないさ。私の力は、“密と疎を操る程度”の能力”。これくらいは造作も無いって事、だよッ！」

剣を生身で受け止めただけではない。先程から彼女は、地球の記憶を具現化した強靱な体躯を持つ超人としてのボディに、ダメージを与えているのだ。先程の上空を飛び回る少女や仮面ライダーの攻撃すら耐え、捌いたというのに。改めて彼女の異常性に気付いたのは、再び渾身の拳撃がナスカの身体を激しく吹き飛ばした時だった。

(“ナスカメモリ”に選ばれたこの私が…!こんな妖怪娘ごときに…!?)

立ち上がれない。ドーパントとして強化された体を以てしても、

その強力な力を耐える事は出来ないというのか。撤退するしかない、ナス力はぼろぼろの身体を引き摺りながら境内から脱出しようと思ってみる。追撃は、ない。思わずそちらを向くと彼女はこちらを意に介した様子もなく、酒を呑んでいる。その事が、彼のプライドを酷く傷つけた。

(おのれ…！必ずや…ッ！！)

そのままナス力は石段ではなく、神社脇の茂みから山の中へと姿を消していった。萃香はそれを見ながら、瓢箪の中身を呷り、やがて気配が完全に断たれると、ふんと鼻を鳴らした。そうして右手の甲を見る。

「なかなかどうして、厄介なもんが紛れて来たね…」

赤く腫れ上がった手の甲は未だに痺れと痛みが取れない。骨にまで損傷は達していないだろうが、しばらくは傷を癒さねば戦う事もままならない。彼女のあらゆるものの密度を操る能力を駆使しても、拳が碎ける覚悟でなければ有効打は与えられなかった。青い剣士はその身体へのダメージというよりは寧ろ慢心と、自尊心を傷つけられた事で戦闘を離脱した。あの怪人自体は、もっと強力な力を秘めている。彼がもっと戦士であったなら、戦いは泥沼化したかもしれない。

「それはともかく、っと…」

萃香は肩を回し、首をこきりと鳴らしながら辺りを 荒れまくった境内を見渡して、盛大な溜め息を吐いた。

「どつするかねえ、これ」



#9 Nの強襲/鬼の鉄拳(後書き)

次回・東方黒切札

「遅いぜ！」

「やってみる価値はあるだろ」

「あーあ……。こんな世界、早く壊れちまえは良いのになあ」

これで決まりだ…！

#10 Nの強襲/垣間見えた闇(前書き)

これまでの東方黒切札は！

「流石、風都の仮面ライダーだ。噂に違わぬ強さだな」

「人間を、なんだと思ってやがる！」

「さあ、悪いけど…ちよいと付き合ってもらおうよ。」

## #10 Nの強襲／垣間見えた闇

#10 Nの強襲／垣間見えた闇

ハードボイルダーが、里へと続く比較的舗装された道を走る。仮面ライダーの強化された視力は既に前方上空に飛行する魔理沙の姿を捉えていた。速度を上げた翔太郎は間も無く幕に跨がる魔理沙に追いつき、魔理沙も独特の唸りを上げる鉄の馬の存在に気付いた。

「遅いぜ！」

「あいつは！？」

風に負けじと声を張り上げた魔理沙の指差す方を見る、とそこには木々を飛び移りながら移動するホッパー・ドーパントの姿があった。

「このまま追い掛けても埒が明かないな、ここで仕掛けてやる！」

魔理沙が一気に高度を落とし、接近すると弾幕をホッパー・ドーパント目掛けて放つ。それによって回避するルートが狭まったホッパー・ドーパントは明らかに回避運動の速度が落ちた。これならば翔太郎はハンドルを切り出来るだけ奴が移動している雑木林へと車体を近付ける。そしてジョーカーのメモリを引き抜くと右手に青いガイアメモリを握り、そのスタートアップスイッチを押し込んだ。

《TRIGGER!》

「こいつで行くぜ…！」

《TRIGGER!》

ロストドライバーへと装填し、スロットを傾けると仮面ライダーの腹部にTの刻印が浮かび上がり、身体の真ん中からその色を鮮やかな青へと変えた。“銃撃手の記憶”を内包する、“トリガーマモリ”によって翔太郎の変身した姿。青き射手の仮面ライダー、トリガーが姿を表した。そして左胸にマウントされた大型の拳銃“トリガーマグナム”を構えると、放たれたその弾丸が魔理沙の弾幕で回避の道を狭まれたホッパードーパントに直撃した。

「やるじゃないか」

「まあな」

『ガアアアッ!!』

銃口の硝煙を吹き消すジェスチャーと共に気障つたらしくガンマンを気取りトリガーマグナムを回転させる。程無くして木々の間からホッパードーパントが怒り狂った雄叫びを上げながら突っ込んで来た。

「しぶといな」

「分かっているとと思うが、突っ込むなよ？」

《JOKER!》

「ああ。一回戦った相手に間合いを間違えるつもりは無いぜ」



魔理沙が言うが早いか上空に逃げ、代わりに黒いボディの仮面ライダーに変身した翔太郎は真っ向から立ち向かう。標的を翔太郎に移したホッパードーパントは、高速で移動しながら攻撃を叩き込んで来る。正面、左右、背後、真上、そのどこからも強烈な蹴りが飛んで来る。

「速え…ッ！」

怒りによつて無理矢理ドーパントにされた適合者が本来の力を引き出したとでもいうのだろうか。その動きを捉え切れず仮面ライダーは防戦一方になってしまう。

「大丈夫か、翔太郎！」

魔理沙が上空から弾幕を放つ。ホッパードーパントが僅かに怯んだその隙に仮面ライダーは距離を離す。弾幕自体はさして効果を持たず、それらは殆ど躲されている。

「魔理沙、あのバカでかいビームはまだ撃てるか？」

「…魔力も無尽蔵じゃない。後一発くらいが限界だぜ」

「十分だ、ちょっと耳貸せよ」

仮面ライダーは弾幕を抜けて来たホッパードーパントを見据えた。そうして魔理沙に耳打ちをする。魔理沙は疑わしげな瞳で黒い仮面に浮かぶ赤い複眼を見た。

「上手くいくのか？」

「やってみる価値はあるだろ」

魔理沙は上空へ再び上がり、翔太郎の周囲に細かな光の粒を弾幕の要領で浮かべた。魔力を殆ど込めていないそれは触れるだけで霧散するような微弱なもの。しかし、それが良かった。翔太郎を囲む光のシャワーが不意に乱れた。そう、高速で移動するホッパードーパントの軌跡だ。引っこり無しに降る光の霧雨は正確にその位置を特定させる。

《JOKER! MAXIMUM - DRIVE!》

右だ。光の雨を割って気配が迫ってくる。翔太郎はそこに目掛けて右足を突き出した。ライダーキック、紫炎を纏った蹴りは見事にホッパードーパントの胴を打ち抜き、上空に跳ね上げた。

「仕上げは」

「任された!」

空中で完全に無防備になったホッパードーパントに、箒に跨がった魔理沙が狙いを定める。その右手に掲げたミニ八卦炉が彼女の魔力を増幅し、眩い光を放つ。それを解き放つように、魔理沙は高らかに宣言した。

「おかわりだ。たんと味わえよ　恋符“マスタースパーク”!!」

轟音と共に極彩色のビームが放たれ、光の本流はホッパードーパントを呆気なく飲み込んだ。ついで爆発音が響き渡り、上空から里の者らしき人影が落ちて来るのを仮面ライダーが受け止めた。排出

されたホッパーのメモリは空中で分解され、たちまちスクラップ同然になりそれを魔理沙が麻袋に仕舞い込む。

「こいつはにとりに見せてみるかな」

見れば人里はもう目と鼻の先だった。翔太郎は変身解除しながら何とか被害を被らせずに済んだ事に安堵する。そして気絶した男をハードボイルダーの後部席に座らせエンジンを掛ける。

「紅魔館に寄る前にこの人を人里に運ばねえとな…ちょっと付き合ってもらっぜ？」

「しつつかし、まるで私まで正義の味方だな…」

そう言っつて肩を竦めた魔理沙は、既に走り始めたハードボイルダーを追うように篝を発進させていった。

「んで、むざむざと戻って来たんだあ…博麗霊夢は殺せず、その場に居合わせた妖怪と人間にボコられて」

幻想郷のどこか、深い森の中にきゅっきゅと笑い声が響き、それに驚いた鳥達が一斉に飛び立った。

そこには六人の男女の人影があり、それぞれが思い思いの格好で

佇んでいる。その中で、もとはさぞ手入れの行き届いていたであろうボロボロのスーツを着た、緑のメツシユを入れた男がロリータファッションのピンク色のメツシユの少女の笑い声に苛立ちをもって返した。

「ならば戦ってみたらいい、あの小娘は諸君がここに来て戦ったどんな妖怪や人間よりも強いだろうからな…！」

「だから負けて当たり前ってか？あーあ、カツコ悪いな」

それに口を開いたのは紫のメツシユが入った前髪の青年。パンキツシユな服に身を包む彼の声はスーツの男の神経を更に逆撫でした。思わずナスカメモリを起動しようとした矢先、冷静な声が発せられた。

「…とはいえ、レプリ・ガイアメモリはオリジナルの性能には到底及ばないわ。今後、強力な妖怪が出て来るとも限らないし、単独行動は避けた方が良くかもしれない…仮面ライダーも確認されたのなら尚更ね」

切り株に座り、足を組み事態を静観して居た細身の美女が青いメツシユの入ったポニーテールを揺らしながら言った。

「随分と弱気じゃない、怖じ気付いたのお？」

「そうじゃないわ。計画が成功するまで、むざむざやられる訳にはいかない。…そうでしょう？」

ポニーテールの女性はロリータファッションの少女の煽るような言葉にも動じず、その顔を地面に座り込む男に向けた。金色のメツシユを幾つも入れたオールバックの男は、金色のジャケットの内ポ

ケットからタバコを取り出しにやりと口許に笑みを張り付けて頷いた。

「ああ、その通りだ。俺達は世界を目茶苦茶に壊す。結界で守られたこつちの世界も、あつちの世界もな」

そう言つて男は不敵に笑う。狂気を宿した瞳にゆらゆらと炎が揺らめく様を、その場の誰もが幻視したことだろう。タンクトップから筋骨隆々の肉体を晒した灰色のメツシユの大男が岩石のような巨体を揺らし、立ち上がったのは数瞬後だ。

「なれば、実効あるのみだ。時間は多くはないからな」

「それじゃ、あたしとあんたで博麗霊夢を殺つちゃおうよ！」

それに賛同するかのようにロリータファッションの少女はまるで父に甘える娘のように彼の背中に飛び乗った。判断を仰ぐように金色のメツシユの男を見る。

事実上指揮を執っているらしき彼は面白そうに親指を立て、実効を許可すると二人はそのまま木々の間へと消えて行った。それを見送つて派手な簪を用いて髪を纏め、その中に赤いメツシユを紛れさせ、着崩れた妖艶な着物姿の女性が、やはり赤いルージュを引いた唇に笑みをたたえて金色の男を見やる。

「良いのですか？あの二人で」

「もちろん。相性抜群だからな、あの二人は」

その言葉に赤い女性は肩を竦め煙管をふかす。彼さえ良ければそれで構わないと言いたげに押し黙り、自分のタバコの先端から立ち

上ぼる紫煙が虚空に消えゆくを見ながら金の男は、本当に楽しそ  
うに声を上げた。

「あーあ……。こんな世界、早く壊れちまえば良いのになあ」

#10 Nの強襲／垣間見えた闇（後書き）

次回・東方黒切札

「単刀直入に言うわ…あんたに手を貸して貰いたいのよ」

「人聞きが悪いぜ。私は死ぬまで借りてるだけなんだけどな」

「紅魔館が主レミアア・スカーレットの盾、紅美鈴！門番の名に賭けてお相手しましょう！！」

これで決まりだ…！

# 11 Kへ急げ／運命は動き出す（前書き）

これまでの東方黒切札は！

「…とはいえ、レプリ・ガイアメモリはオリジナルの性能には到底及ばないわ」

「あなたとあたしで博麗霊夢をやっちゃおうよ！」

「こんな世界、早く壊れちまえれば良いのになあ」



# 1 1 Kへ急げ／運命は動き出す

# 1 1 Kへ急げ／運命は動き出す

紅魔館。

妖怪の山の麓、霧の湖の畔に浮かぶ島に、目に痛い程鮮やかな赤の建造物が立っている。その洋館こそが紅魔館、人は愚か妖怪や妖精すらも立ち入ろうとはしないその赤き館。その一室で、血のような色をした紅茶を飲む少女が居た。赤い瞳を細め、癖っぽい水色の髪をリボンがあしらわれたピンク色のナイトキャップから揺らしながら優雅に笑みを浮かべて見せる彼女こそが、この紅魔館の主にして吸血鬼、レミリア・スカーレットだ。脇には彼女の従者にして館の妖精メイド達を取り纏める十六夜咲夜が、銀の髪にホワイトブリムを乗せ、メイド服を寸分の隙もなく着こなした出で立ちで控えている。レミリアが飲む紅茶を淹れる事もまた、彼女の仕事のひとつだ。

「珍しいわね、あなたがここに来るだなんて…まさか私とお茶しに来た訳ではないわよね？」

ティーカップを置き椅子に腰掛け頬杖を突いたレミリアは面白そうに口端を吊り上げながら相對する訪問者、肩の部位がそっくり切り取られた不思議な紅白の巫女服を纏う黒髪の少女、幻想郷を覆う博麗大結界を管理し幻想郷の数多の異変を解決して来た博麗の巫女・博麗靈夢に向けて言った。

「単刀直入に言うわ…あんたに手を貸して貰いたいのよ」

対する霊夢は、冗談など一切通じないトーンでレミリアに言い放つ。すると幼い風貌の吸血鬼は驚いたようにその紅玉のような瞳を一瞬緩く見開くと再び優雅な笑みを浮かべた。

「ふうん…訳ありみたいね。あなたが私に協力を仰ぐくらいだもの」

「お嬢様、訳ありも何も…“怪人”の話は今や幻想郷中に広まっています」

咲夜の指摘にレミリアは年相応の少女のようにキョトンと首を傾げる。霊夢はやれやれと大きな赤いリボンを揺らしながら頭を振り、咲夜は咲夜で静かに嘆息した。

「な、なによ二人して」

「滅多に外に出ないあんたならまあ、知らないのかもしれないだろうけど…幻想郷中に人も妖怪も見境なしに襲う怪人が現れてんのよ。私も何体かと戦ったんだけど…そいつらは“スペルカードル”に則らずにやりたい放題」

「つまりこのまま怪人達が暴れ続ければ、幻想郷の均衡が崩れてしまっ、ということですよ」

「…それだけじゃない。どうもそいつらは博麗大結界を突破してこっち側に来たらしいのよ」

「…博麗大結界を？」

博麗大結界は外の世界と幻想郷とを隔てる二つの結界のうちの一つとしてこの世界を維持するのに非常に重要なもの。そこに綻びが出来る事がどれほどの事か、幼い容姿ながら聡いレミリアにも分からないはずは無かった。

「話は分かった。こんなに住みやすい世界だもの、手を貸してあげるのは吝かじゃないわ…ただ、知つての通り私は日中は外に出られない。そういう時は咲夜を貸すから、それで良いわね？」

「お嬢様の仰せのままに」

「分かったわ、それでも構わない」

咲夜が恭しくお辞儀をし、霊夢も承諾するように頷いた。ようやく話が纏まった、とばかりに場の空気が少しばかり緩んだ。

「ところで、あなたパチエの所に行ったのよね？どうしてわざわざ此所に来たの？」

「ああ、暫く関係ありそうな書物を探したんだけど、流れ付いたものなら一緒に文献もこっちに来たんじゃないかってね。…考えてみれば奴等は無理矢理乗り込んで来た怪物だし、日が暮れる前に引き上げたわ。パチュリーは引き続き調べてくれるみたいだけど」

「あの子の場合単なる知的好奇心と行った所かしらね」

肘を突いたままレミリアは面白そうに笑った。霊夢は疲れ切ったように肩を回しながら溜め息吐き捨てる。

「こちとら伊達や酔狂でやってるわけじゃないんだからもう少し協

力的に調べて欲しいもんだけど……まあ、何かあったら宜しく頼むわね」

「あら、もう帰るの？…もう暫く、ゆっくりしていきなさい」

レミリアが踵を返した霊夢に問う。霊夢は振り返り肩を竦めて笑った。図書館での調査、そしてレミリアに協力を取り付けるという行動を追えた以上ここにとどまる理由は霊夢にはないのだ。

「なによ、別れを惜しむなんてあんたららしくない」

「ええ、だってここで引き止めなかったら、永遠のお別れとなってしまうもの」

レミリアの、宝石のように赤い瞳が静かな光を放つ。その言葉に霊夢の顔から笑みが消え、それまで無表情だった咲夜ですら驚愕にその目を見開いた。

“博麗霊夢は紅魔館を後にし、その道中に件の得体の知れない三体の怪人と遭遇。単身これらと戦うものの三体の連携攻撃の前に、善戦虚しく死亡する”運命だった。

人里・上白沢邸

ハードボイルダーを停めた翔太郎は、魔理沙と共に上白沢邸に上がり、おぶっていた男性を布団に寝かせながら、慧音に声を掛けた。出してくれた日本茶が湯気を立てている。

「…そういう訳だ、頼めるか？」

「ああ、その辺りは任せてくれ。妖怪に襲われたとでもでっち上げる。…巫女には会ったのか？」

流石に“怪人にされていた”などと言えば奇異の目で見られるに違いない。迫害されてしまうかもしれない。自らと異なるもの、未知なものを人は恐れ、忌避する。それは慧音自身が身をもって知っていたことだった。

「いや、入れ違いになっちまった。紅魔館に行ったらしい」

「で、私とその水先案内人って訳だ」

あれだけ乗り気では無かったにも関わらず魔理沙がしゃしゃり出る。慧音は心配そうに翔太郎を見た。

「翔太郎さん、ガイアメモリを盗まれるなよ？魔理沙は蒐集癖があるからな」

「人聞きが悪いぜ。私は死ぬまで借りてるだけなんだけどな」

「お前なあ……」

うさんくさそうな面持ちで魔理沙を見やるも、およそ悪びれていない様子に翔太郎と慧音は揃ってやれやれと溜め息を吐いた。

「……まあとにかく、道中気を付けてくれ。何かあるか分からないからな」

「そつちもな。詳しい話は夜にでも話す」

玄関先まで見送りに来た慧音の言葉に頷き、ハードボイルダーを発進させるべくシートに跨がると魔理沙も箒に跨がり宙に浮く。

エンジンの唸るような音を響かせ、翔太郎は魔理沙と共に今度こそ紅魔館に向かって走り去っていった。

「しかし、あの堅物慧音と同棲か……どこまでいったんだ？」

「何言ってるんだよ!？」

魔理沙の軽口に、翔太郎はハンドルを切り損ね派手に危うく転倒しかけたのは言うまでも無い。

紅美鈴は、うつらうつらとして居た表情を不意に引き締めた。何かが、この主の館に向かつて来る。その禍々しい“気”を感じとり、美鈴は背を預けていた門から身体を離れた。

「一、二…一人は気が微弱だけど…全部で三人、か」

両手を視界に映し、握っては開くを繰り返す。そうして直立不動のままに門番たる風格にてやがて現れた三人の男女の前に立ちはだかった。ピンク色のメッシュの混じったツインテールの少女。フリルがちりばめられた所謂ロリータファッションと行ったところだろう。そして岩石のような分厚い筋肉をタンクトップから覗かせた灰色のメッシュの大男。そして彼の肩に担がれる形でぐったりとした男性が一人。

「こんにちは、紅魔館にどのような御用でしょうか？」

内心彼女は穏やかではなかった。先程からの気も元より、その傷ついた男性を美鈴は知っていた。人里でも有数の武闘家であり美鈴に度々挑戦しに来ていた彼が、地面に下ろされるなり膝を突いて美鈴を見て息も絶え絶えといった風に呟いた。

「美鈴ちゃん…逃げろオ…」

「はいはい、余計な事言う前に戦ってもらおうよ？喜びなよ、あんたじゃ辿り着けない妖怪に渡り合える力なんだからさあ！」

少女が、手にした白い機器を男の腕にあてがった。その引き金に似た部分を引くと、バシユ！という音と共に男の腕に黒い小さな文様を浮かび上がらせた。抵抗する彼を押し伏せ、少女はポーチから金色の禍々しい長方形の物体を取り出した。

《SMILODON!》

怪しげな声が響き渡ると、少女はその物体を男の腕に浮かび上がった紋様に突き立てた。次の瞬間、男は苦悶の声を上げながら姿を変えた。

「ガ、ああああああ!？」

獣のような体毛、両腕の鋭い爪と猫科のような顔に上顎から二本の牙を生やした姿は豹などに通ずる。古代の地球に存在したサーベルタイガー、スミロドンの記憶を内包した“スミロドンメモリ”により顕現した“超人”<sup>ドーパント</sup>、それがスミロドン・ドーパントだ。

『ギニヤアアア、ア!！』

嘔れた猫のような鳴き声を上げながら突貫して来たスミロドン・ドーパントに、美鈴は一瞬面食らい、回避が遅れた。辛うじて身体を捻り攻撃を躲すが、鋭い爪がチャイナ服を引き裂き彼女の脇腹を浅く裂いた。鮮烈な痛みが美鈴を襲う、と同時に悟る。これが命を賭けた本物の“戦い”だと。

「きやははっ!やるう!ねえ、あんたの守ってるお屋敷にさあ、博麗霊夢つてのが来ているでしょ?そいつを渡して欲しいんだけど」

脇腹の傷に一瞥をくれる。赤い血が彼女の服を汚しているが傷は深くない。美鈴は足を広げ流れるように構えた。それは規則化された幻想郷の戦いで決して使われる事の無くなつた彼女本来の戦闘スタイル。構えたまま美鈴は、彼を怪物に変えた少女達とそこに飛び退いて控えるスミロドン・ドーパントに視線をやる。



「誰だかは存じ上げませんし、知りたくもありません。ですが、我が主とその客人に危害を加えるようであるなら全力をもって迎え撃つのが私の役目……何より……！」

轟、と風がうねる。空気が、彼女の気を受けて震えていた。美鈴の身体にうつすらと、虹色の光が浮かぶ。ギロリと、その青い瞳は真っ直ぐに少女を射抜いた。

「我が友人を弄ぶような真似をする輩を、どうあつても私は許す事が出来ないツツ……！」

気が爆発した、圧倒的な闘気が虹色の光をもって、波打つように美鈴を包んでいる。思わず少女は笑みを消して暗く澱んだ瞳を向けた。そして傍らに愛猫のように控えるスミロドン・ドーパントへ命令する。

「……気に入らない、殺っちゃえ」

「紅魔館が主レミリア・スカーレットの盾、紅美鈴！門番の名に賭けてお相手しましょう……！」

# 11 Kへ急げ／運命は動き出す（後書き）

次回・東方黒切札

「運命なんてもんにおいそれと明け渡すほど、私の魂は安かないわ  
！」

「まずは目障りなカンフー女をぶっ殺そうよお！..！」

「探偵さ...！」

これで決まりだ...！

# 12 Kへ急げ／紅魔戦線（前書き）

これまでの、東方黒切札は！

「美鈴ちゃん…逃げろオ…！」

「気に入らない、殺っちゃえ…！」

「紅魔館が主、レミリア・スカーレットの盾、紅美鈴！門番の名に賭けてお相手しましょう…！」

# 1 2 Kへ急げ／紅魔戦線

# 1 2 Kへ急げ／紅魔戦線

「私が、死ぬ？」

「ええ、ほぼ間違いなくね」

霊夢は言葉を失った。自分が死ぬと宣告されて冷静でいられる者はそういないだろう。彼女が取り乱さなかったのは異変解決という荒事に慣れていたからだろうか。それでもこれ迄の異変も、死と隣り合わせだったわけではなく、彼女はその言葉をどこか余所余所しい気分で聞いていた。しかし、同時にレミリアも決して冗談で言っているわけではないことも彼女の口ぶりから読み取れた。

「…それは、穏やかじゃないわね」

「私の力でそれを变えることはできるわ。ただし」

レミリア・スカーレットに備わる能力、それは“運命を操る程度の能力”。文字通り物事に定められた運命を思うがままに変えられる能力。しかしその発動はその運命を变える事が出来る特定条件が揃って初めて可能となる。そしてその条件は覆しがたい運命になればなるほど困難なものになってくる。

「今回は“死”という覆すことの難しい運命。あなたが紅魔館に来なければ恐らくは変えられなかったかもしれないわ」

「じゃあ…」

しかしレミリアは頷かない。決定的な要素が足りないのだ。運命を変えるというのは万能に見えて決してそうではない。思わず霊夢も口をつぐんでしまう。

その時、館の外だろうか、遠方から爆発音が聞こえ、すぐに紅魔館に仕える妖精メイドの一人が飛び込んできた。そのメイドは脇に控える咲夜に耳打ちするとすぐに引っ込んで行く。

「お嬢様。どうやら紅魔館に侵入しようとする輩が美鈴と戦闘を開始、三人の内一体は例の怪人との報告が入っています。」

「来たわね…あなたを狙う奴等が。咲夜、あの娘の助太刀をしてあげて」

「畏まりました」

主の名を受けた咲夜が一礼するとその姿は忽然と掻き消えた。聞くところによれば相手の数は三、まともに挑めば運命の通りの末路を歩むことになるいえ幻想郷を脅かす存在を相手取ることのできない苛立ちに霊夢は奥歯を噛み締めた。

レミリアはすっかり温くなってしまった紅茶を飲み干すと立ち上がり霊夢の目の前まで歩いて行き、その真つ赤な瞳で彼女を覗き込むように見上げる。

「霊夢、美鈴と咲夜が時間を稼いでいる間にあなたは逃げなさい。そうね…永遠亭辺りなら見つかりづらいわ」

「お断りよ、私は博麗の巫女。幻想郷を脅かすものを退治する使命がある」

霊夢は険しい表情で言い放った。語調の強さと比例するように、既に両手にお祓い棒と札を握り締める力は強くなっていく。真つ向から言葉をはね除けられたレミリアはしかし、動じない。

その間にも、紅魔館の外からは断続的に爆発音が響いている。彼女の部下である咲夜と美鈴が戦闘を続けているのだろう。霊夢もすぐにも飛び出していきたいようにレミリアから背を向けて顔を逸らした。それでも飛び出していないのは、霊夢の中に迷いがあるからだ。

「命に代えても幻想郷を守るのが巫女の務め。でももし、刺し違えて奴等を倒しても黒幕じゃなかったら」

レミリアの声が霊夢の迷いを声にした。考えを言い当てられて霊夢は思わず振り返ってレミリアを睨んだ。それが見当違いな行為だと、霊夢が一番よく知っている。それでもそうせずにはいられないかったのだ。何もかもが予想外の事態、自分の死までも宣告された少女に冷静な判断を求めるには、霊夢はまだ幼い。

「睨まないで頂戴、霊夢。可愛い顔が勿体無いわ」

「あんたが言う運命とやらが正しければ、正直どうしようもない。策も見つからない。でも、私は、ただ黙って死ぬかもしれない運命に怯えるのなんて真つ平ごめんなの」

霊夢は、お札を握る手で親指を立てて自分の胸に突きつけた。まるで自分の魂がそこにあるとでもいうように。そして吼えた。その姿は、人間を遥かに凌ぐ力を持つ吸血鬼たるレミリアに僅かながらの畏怖を感じさせるほどだった。ああ、自分はこの魂に敗れたのだと、レミリアは自らが起こした異変を思い起こす。

「運命なんてもんにおいそれと明け渡すほど、私の魂は安かない！」  
運命が、変わる兆しを確かに見せた。

その少し前、紅魔館・門前。

「ッだああああ！！」

正に、地を割る龍のごとき気迫。虹色の気をまとった美鈴は懐に飛び込んできたスミロドン・ドーパントを肘の一撃で吹き飛ばした。大男はそれを見て、隣で苛立たしげに爪を噛むピンクのメツシユのロリータファッションの少女に声をかけた。

「桃花<sup>トウカ</sup>、俺がああ妖怪を押さえる。お前はスミロドンと中の博麗霊夢を殺れ」

「ええ、そうしてよ、灰<sup>カイ</sup>。でもお、まずは…」

桃花と呼ばれた方の少女は、ポーチから自身のガイアメモリを取り出して起動させた。

ARMS！

「まずはあの目障りなカンフー女をぶつ殺そうよおお！！！」

狂気に染まった声を上げながら、桃花は首に巻いたチョーカー型の“ガイアドライバー”に自らの“アームズメモリ”を突き立てた。彼女の小柄な体が大きく歪み、その姿を全身に武器を蓄えた“アームズ・ドーパント”へと変容させた。その右手はみるみる内に剣へと変異してゆき、美鈴を串刺しにせんと突進を掛ける。それを紙一重で避け、カウンターに蹴りを放つ。腹部を横薙ぎに襲った一撃で距離を離し、しかし入れ違いに飛んできたスミロドン・ドーパントの爪は、腹で受けることとなった。

「いっづ……！」

深手を避けるために飛び退くが、痛みにはバランスを崩し尻餅をつく。すぐさま気进行操作して止血に掛かるが息つく暇もなく今度はアームズ・ドーパントが背中に背負った鈍器のような大剣を振りかぶるのを見てその場を離れる。

気の操る力はある程度の集中力を要する。一対多を強いられる今の状況では、自分の周りに気を張り巡らせて、死角からの攻撃を受けないようにすることにどうしても傾きがちになってしまう。

「なんのまだまだ……！紅魔館の門を任されている以上は、簡単には倒れませんよ！」

腹部の傷もものともせず、美鈴は再び立ち上がった。既に傷口からの出血は止まっている。追撃を掛けてきたアームズ・ドーパントのシールドソードを強烈な蹴りで跳ね上げると、がら空きの胸に渾身の鉄拳を放った。気を圧縮させた砲弾のような一撃は本来受け止めるべきシールドソードを無力化されたアームズ・ドーパントを吹き飛ばした。



『ガアアアっつー!!』

「もひとつおまけにッ！」

美しい紅色の髪を翻し、美鈴が空中へ舞い上がる。慣れ親しんだ飛行ではなく、落下の勢いをつけるための跳躍。アームズ・ドーパントの受け身をとる場所を見事に捉えその顔面に当たる部分を蹴り抜き、地面へと叩き付けた。ひらりと再び跳躍し、門を背にして距離を離す。

「桃花、気が済んだなら館に迎え。俺が押さえると言ったはずだ」

COMMANDER！

灰と呼ばれていた灰色のメッシュを交えた髪の大男は、自分のガイアメモリを起動させた。それを同じく首に巻いたガイアドライブに挿入し、その姿は一瞬の内にメカニカルな外見の軍人のような姿へと変わる。指揮官の記憶を内包したガイアメモリで顕現したドーパント、“コマンダー・ドーパント”へと変化した灰は、その特殊能力で、仮面兵士と呼ばれる尖兵を召喚した。電磁警棒を振りかざし、突進してくる仮面兵士を美鈴は真っ向から殴り付けた。しかし十数人もの仮面兵士はその物量で次々に押し寄せてくる。

『桃花、行け』

『仕方ないなあ…このイライラは博麗霊夢を殺して帳消しにしよーっつー！』

「行かせるかぁー!!」

仮面兵士達をはね除け美鈴が駆ける。しかし、その行く手に回り込んできたスミロドン・ドーパントには完全に対処できなかった。その蹴りをまともに受け、仮面兵士たちの方へと押し戻された。たたらを踏んだ完全に無防備な背中に電磁警棒が一斉に突き立てられる。その隙にスミロドン・ドーパントが離脱して紅魔館に駆けていく。

「あ、あ、ああアツッ！！！」

苦悶の声をあげながら美鈴は力を振り絞ってスペルカードを取り出し発動させた。華符“セラギネラ9”

その一撃で美鈴を取り囲んでいた仮面兵士達はことごとく消滅していく。しかし、美鈴はダメージからガクリと膝を突いてしまう。その視界の端にアームズ・ドーパントはこちらを気に駆けることもなく館へと駆けて行くのが見えた。それを見て、全身に力を込める。

か

『 しぶといな 』

「生憎と、タフさは取り柄でしてね……！」

美鈴はコマンダー・ドーパントと対峙した。

口の中に溜まった血を吐き捨て、美鈴は腰を落とす。先程からの口振りでは彼らの標的はあくまでも霊夢だ。しかし、近くにいるレミアに被害が及ばないはずない。早くこいつを倒して、さっきの怪人たちを追わなければ。

『 まあ、いい。どのみち、もうほとんど戦えないだろう。さっさとカタをつけて、俺も行かせてもらおう 』

これ以上、紅魔館に侵入を許すわけにはいかない。しかし、度重なる攻撃に晒され続けた美鈴は如何な妖怪と言えど、コマンダー・ドーパントの言う通り戦う力はあまり残ってはいなかった。先程の電磁警棒によって流された電流は美鈴の筋肉を痙攣させ、思うように体を動かせずいたのである。

「それでも、あなた一人くらい…！」

なんとかかしてみせる、しかし美鈴はそれを最後まで言うことはできなかった。コマンダー・ドーパントの前に壁のように全滅させたはずの無数の仮面兵士が再び現れたのだから。

『生憎と、こいつらを作るのは造作もないんでな…やれ』

仮面兵士が大挙して美鈴に迫る。圧倒的な物量、それを前に虚を突かれた美鈴に残された選択肢は残っていなかった。しかし、それらが美鈴に殺到する前に、灰は無数のナイフが何の脈絡もなく仮面兵士達の上方から出現したのを見た。そしてそれは、まさに攻撃に晒されようとしていた美鈴も同じく見ていた。

空間に現れたナイフは次々に仮面兵士の頭部や胴体に突き刺さり、消滅させていく。それが何なのか、この場において知り得るのは美鈴しかない。コマンダー・ドーパントは生き残った仮面兵士を下がらせる。

「あら、随分齒応えがないのね」

その場に、涼やかな少女の声が聞こえてきた。ほどなくしてその声の主、“時間を操る程度の能力”を持つ、十六夜咲夜は唐突に、彼女のみが行動を許された時間の中を渡ってきたかのように美鈴の隣に出現した。

「さ、咲夜さん!?!」

「お嬢様からあなたの手助けを仰せつかったわ…大丈夫?」

「え、ええ…でもそれより館の中に怪人を二体取り逃してしまいました…」

「何か考えがあつての事でしょうね。お嬢様は霊夢を守るみたいだから、ね。私達は、この方にお帰り願ひましょう…全力で」

咲夜の赤い瞳が、コマンダー・ドーパントを見据えた。暫し唾然としていた美鈴は、しかし咲夜の登場で自身の闘争心が奮い立つのを感じた。勝てる。彼女はくずおれていた膝を立ち上げらせ、咲夜と並び立って構えた。

「はい、やりましょう…!咲夜さん!」

『…5thまでは全面から攻撃。6thから9th、10thから13thは両翼から攻撃しろ』

コマンダー・ドーパントは仮面兵士達に指示を出した。自らはまだ攻撃をしていない辺りまさに指揮官の記憶を体現した姿である。そうして前方左右から迫る仮面兵士を咲夜と美鈴は背中合わせに迎え撃つ。

命令に忠実とはいえ、それまでだ。電磁警棒を振るう挙動など、その数が減ってしまえば、武闘家である美鈴に隙はいくらでも見つけられた。

仮面兵士が電磁警棒を振り上げた瞬間、その顔面を拳が打ち抜く。その動作にもやや鈍りが見えるが、その隙を突こうとする攻撃には

咲夜が投擲したナイフが的確に阻み、仮面兵士の急所を確実に押さえる。豪快な美鈴の攻撃に繊細な咲夜の一撃が噛み合った二人の動きはまさに息のあった連携だった。

『小癩な…生き残りは俺の前で壁を作れ』

指示を受け、仮面兵士達はコマンダー・ドーパントの前に立ちはだかる。彼女達はそれらを蹴散らして行き、その間にコマンダー・ドーパントは全身からミサイルを発射した。それは本来ならば強化アダプターを介した強化体にもみ使える能力だが、彼らの首に巻くガイドライバーは、メモリの力を引き出し一定以上の力を発揮できようになる為、その恩恵として能力を付加することが可能となっているのだ。

白煙を尾のように引いて飛来するミサイルに美鈴は目を剥いた。

「あわわわわわわ!!?」

「くっ、時よ止ま…」

「魔符“スターダストレヴァリエ”!!!」

咲夜が能力を発動しようとした瞬間、まずこちらへ近づく重低音の唸りが聞こえた。そして次に高らかな宣言を以て眩い弾幕が展開され、ミサイルを次々に破壊して行く。周囲で爆発が相次ぐなか、V時の角の下に輝く双眸を備え、足の代わりに車輪を持った鉄の馬が嘶きながら男を乗せて走り抜けてくるのを咲夜と美鈴は見た。

『くっ…』

鉄の馬の進路にいたコマンダー・ドーパントは咄嗟に突撃を躲す。

その間に、仮面兵士達はミサイルの誘爆と弾幕により全滅していた。そして黒煙が晴れた時、咲夜と美鈴の前に立ちはだかつていたのはとんがり帽子を被り、白黒の衣服に身を固め箒を肩に担いで立つ金の髪の少女と黒と緑のツートンの鉄の馬に跨がり被っていたヘルメットを脱ぎ素顔を覗かせた青年だった。

「大丈夫か!？」

青年の方が咲夜と美鈴に聞く。咲夜はともかく美鈴は身体の至るところに傷を負い、傍目から見れば重傷だろう。実際のところ、美鈴は妖怪とはいえ、人を超えたドーパントの攻撃は対妖怪以上のダメージを負わせていた。

「え、ええ…それより、あなたは？」

「探偵さ」

「ついでに物好きで外来人のな」

やや面食らったように尋ねた咲夜に鉄の馬、ハードボイルダーから降りた青年　翔太郎はハットを被りながら気取った声色で答え、魔理沙がその後を受け持った。翔太郎は深く被ったハットを押さえながら魔理沙にぼやく。

「お前なあ、人が折角ハードボイルドに決めたつてのに…」

「ホントのことだろ？」

そんな掛け合いをする折、三度生成された仮面兵士が魔理沙と翔太郎に襲いかかる。しかし、二人は慌てなかった。魔理沙が弾幕を張り進行を遅らせ、その隙に翔太郎はロストドライバーを腰に装着

し、ガイアメモリを起動した。

JOKER!

「いくぜ…変身」

JOKER!

翔太郎の身体に集まってきた微細な粒子が、やがてその身体を漆黒の超人の姿へと変えてゆく。瞬時に仮面ライダージョーカーへと変身した翔太郎は弾幕を掻い潜り仮面兵士に接近するとまず一人目を勢いをそのままに殴り飛ばした。降り下ろされた電磁警棒を腕ごと受け止め腹部に強烈なボディブロー。それだけで二人目が沈黙し、背後に回る三人目は後ろ蹴りで後退させ、振り返る動作に絡めた回し蹴りで四人目と纏めて吹っ飛ばした。

その間も魔理沙が弾幕を展開し、仮面ライダーに気を取られた仮面兵士達を次々に倒して行く。道が開かれるや否や、仮面ライダーはコマンダー・ドーパントへ突貫してゆく。

「うおらあッ！」

顎を狙い打ち出すフック。それに怯んだ隙に腹部への拳の連打。軽快な格闘でコマンダー・ドーパントを翻弄する姿は、美鈴の目から見ても感嘆するものだった。仮面ライダーの攻撃はどれも人間が繰り出せる技にすぎないが、その一つ一つが極限まで洗練されている。

ここでコマンダー・ドーパントも反撃に出た。電磁刃コマンドソウを振りかざし、仮面ライダーを斬り裂かんと迫る。大柄な灰の体格をそのまま反映しているため、一撃一撃が重い。翔太郎はそれを躲しながら冷や汗が流れるのを感じた。

「何て馬鹿力だこいつ…！」

そしてとうとう横薙ぎの一閃が仮面ライダーの胸部を捉えた。火花を散らしながら地面を転がって行く。それを援護するように魔理沙が弾幕を張り、そこでようやく我に返った咲夜も、派手な魔理沙の弾幕を隠れ蓑にしてどこからともなく大量のナイフを投げつける。

「やつの攻撃をまともに受けてはダメです！受け流して！」

この間に前に躍り出た美鈴はコマンダー・ドーパントに肉弾戦を挑む。襲い来るコマンドソウをその腕の動きに添って身体を逸らし、勢い余ってバランスを崩した所に膝蹴りを叩き込む。気を内包したそれは生身ながら仮面ライダーにも匹敵する重い一撃となってコマンダー・ドーパントを後退させた。

しかしその直後、抜けきれていない痺れで美鈴の身体が揺らいだ。その隙を見逃すはずもなく、コマンドソウが彼女の左肩を深く斬り裂いた。鮮血が飛び散り、傷口に走る電流に美鈴は地面に倒れ伏しのたうち回る。

「が、あつ！あああああ…！！！」

「美鈴！？」

「てめえ…！！！」

TRIGGER！

咲夜が駆け寄り、翔太郎が怒りに震えた声を絞り出す。魔理沙の援護を受けて、肉薄した仮面ライダーはコマンドソウを振り下ろす



右腕を柔らかく受け止め勢いを下方方向に流し、次の瞬間怒りの籠った拳を顔面に見舞う。

TRIGGER!

距離を取ったコマンダー・ドーパントに駆け寄りながら翔太郎はトリガーメモリを装填した。青い装甲に身を包む仮面ライダートリガーへと姿を変えた翔太郎はトリガーマグナムで撃ち出されたミサイルを破壊してゆく。そして弾丸を叩き込みながら接近し、上段への蹴りでコマンドソウを叩き落とす。

『ぐ、が…っ!?!』

武器を奪われ、仮面兵士を呼び出そうとした瞬間、コマンダー・ドーパントの身体が虹色の小爆発を起こした。それは断続的に続き、がつくりと膝を突く。その姿に、美鈴が咲夜に抱き起こされたまま血の気のない顔で笑った。

「攻撃したときに流し込んだ私の気を、あなたの中で爆発させました…これは効くでしょう?」

『きつ、ま…!』

「これで決まりだ」

TRIGGER! MAXIMUM - DRIVE!

膝を突くコマンダー・ドーパントに向けて、ゆつくりと仮面ライダーはトリガーマグナムにメモリを装填し、銃身を起こした。青い光が銃口に集まり、それを突きつける。

「くらいな、ライダーシューティング」

一際強い光を放ち、撃ち出されたエネルギーはコマンダー・ドーパントを飲み込み、爆発を起こした。マキシマムドライブを受け、コマンダー・ドーパントは、灰の姿へ戻り首に付けたガイドライバーから吐き出されたコマンダーメモリが弾けるのを見ながら立ち上がる。

「…仮面ライダー、俺を倒したところでお前ごときに我々の計画を止められると思うなよ」

捨て台詞と共に逃げてゆく灰を一瞥し、仮面ライダーは変身を解除した。そして倒れる美鈴のもとに駆け寄る。肩口をはだけ、既に咲夜により手当てが行われていた。

「おい、大丈夫か？」

「はい、なんとか…お陰で助かりました」

美鈴の感謝の言葉を聞きながら？ 魔理沙は咲夜へと言葉を投げ掛ける。それは翔太郎も知りたいことであり、ここに来た目的でもあった。

「なあ、咲夜。霊夢は来てるか？」

「ええ、命を狙われてるわ」

二人の考えに反して紡がれた咲夜の言葉に魔理沙と翔太郎は揃っ

て驚きに声を失った。それを見ながら今度は美鈴が上体をゆつくりと起こしながら言葉を続ける。

「本当はやつらは三体いて、残りを館に侵入させてしまったんです。だから今も戦ってると思います…いてて」

その言葉が合図となったかのように館の方から激しく爆発が鳴り響いた。それに急かされたかのように魔理沙は翔太郎の肩を叩く。翔太郎もそれに頷いて、立ち上がると赤い館に目を向けた。

「こうしちゃいられないぜ、翔太郎！」

「ああ、悪いがメイドさん。この子を頼むな。俺達は残りのドーパントを倒しに行く」

「魔理沙の知人なのでしようけれど、本来ならどこの馬の骨ともわからないしおまけに外来人のあなたを紅魔館に入れたくはないけれど、今は猫の手も借りたい状況なのよ。よろしくお願いするわ」

咲夜の言葉に翔太郎はハードボイルダーに跨がり、魔理沙も箒へと飛び乗った。二人はそのまま門を潜り紅魔館へと向かい、門の前には美鈴と咲夜が残された。立ち上がるうとして顔をしかめた美鈴は、無理矢理咲夜の膝に寝かされた。

「そんな身体じゃ何も出来ないわ。ほら、包帯巻いたげるから大人しくして」

「うう…面目ないです。奴等を通してしまっなんて」

「あなたが門を通すのはいつもの事じゃない」

その言葉に美鈴はがっくりと頂垂れた。止血を済ませた肩口に包帯を巻き付け終え、脇腹や腹部といった負傷箇所を消毒しながら言葉が続ける。

「冗談よ、…今回は一人でよく頑張ってくれたわね…ありがとう、美鈴。後の事は、魔理沙たちやお嬢様に任せましょう…」

咲夜の言葉に、紅魔館を振り仰ぐ。聞こえてくる激突音は戦闘が始まっていることを容易に物語っていた。決して勝利とはいえない結果である。美鈴は只、主や友人の無事を祈るしかない。その事がひどく悔しかった。やがて、極度の緊張から解放された美鈴はゆっくりと目を閉じ、一息を吐いて意識を沈ませていった。

（お嬢様…みなさん、ご無事でいてください…）

#12 Kへ急げ／紅魔戦線（後書き）

次回・東方黒切札

「質問しかないのお？でも、冥土の土産に教えてあげるう」

「だったらこっちも、問答無用！」

「見くびるな、外なる者よ」

これで決まりだ…！

# 13 気高きVノ亡き王女の為のセプテット（前書き）

これまでの東方黒切札は！

「生憎と、タフさは取り柄でしてね…！」

「くらいな、ライダーシューティング」

「仮面ライダー…俺を倒したところで、お前<sup>ら</sup>ごときに我々の計画を止められると思うなよ」

# 13 気高きV / 亡き王女の為のセプテット

# 13 気高きV / 亡き王女の為のセプテット

紅魔館に侵入を果たした桃花、アームズ・ドーパントとスミロドン・ドーパントは激しい弾幕の雨霰に晒された。外観に反して広大な紅魔館のロビー、扉から見て真正面の位置に、紅白の巫女服に身をまとった少女が構えている。桃花はそれが抹殺対象であるとすぐさま気付いた。狂気を滲ませた声色で呟く。スミロドン・ドーパントは毛を逆立て今にも飛び掛かるうと体勢を低くし構えている。

『見い付けたあ…!』

「…あんだ、人語を喋れるのか…なら、忠告よ。これ以上幻想郷を害すること無く去ると言うなら、見逃すわ…さもなければ…」

お抜い棒と札を構えた巫女・博麗霊夢はそれらを構えて眼前の二体の異形を見据えて低く言い放つ。しかしそれを言い切る前に、アームズ・ドーパントが耳障りな声で笑う。

『バツカじゃなあい! ? あたしらはね、博麗霊夢…あんだを殺しに来たんだよお?』

「やっぱり、レミリアの言った通り…さしずめ結界をどうにかするつもりなんでしょうけれど、何のために?」

彼女(?)らは自分を殺そうとしている。幻想郷に張り巡らされた博麗大結界を司る己が狙われると言うことは、つまりは結界の破壊辺りが狙いなのだろう。

『今から死ぬ人間にそんなこと教えても仕方ないと思わなあい？』

アームズ・ドーパントは右手を歪に変化させ、銃を形作るとその銃口を霊夢に向けた。いきなり打ち出されたそれを霊夢は、広大なロビーを飛行して躲す。

「だったら、こっちも…問答無用！」

急旋回、霊夢は弾幕を展開し二体の動きを止める。スミロドン・ドーパントも光弾を発射してくるために敵側の弾幕が密になってきた。同じ場所に五秒と留まれない。それでも霊夢は空中で姿勢を制御しアクロバットな機動でそれらを躲してゆく。擬似的な“弾幕ごっこ”の形態を作り出し、慣れ親しんだ戦いの形を取り、霊夢は優位へと立っていた。唯一異なるのは、霊夢の攻撃に明確な敵意が籠っているということだ。

「あんたが幻想郷に怪人をけしかけてた張本人なの！？」

『さつき答えないって言ったつもりだったんだけどあ…まあ、いいや、冥土の土産ってやつう？ドーパントにするのはこの人間や妖怪、あたしらが引き連れてきたわけじゃないんだよあ』

霊夢はその意味するところを直ぐ様把握した。自身が戦っていた怪人たち、それらはどういうわけか気絶させたりすると幻想郷の人間や、妖怪の姿に戻っていた。つまり、彼女らが何らかの方法を用いて、無理矢理怪人に仕立て上げていたと言っことだ。

「許さない…！！」



怒りの滲む声で霊夢は弾幕を展開した。床や調度品を砕く高威力のそれは瞬く間に紅魔館のロビーに暴風雨となって吹き荒れたが、彼女の激情はかえってその弾道を読みやすくしてしまっていた。加えて回避に粗が見え、隙を突かれた霊夢は跳躍したアームズ・ドーパントに足首を掴まれ、地上に引きずり下ろされた。地面に背を激しく打ち付け、霊夢は息の詰まるような激痛に目を剥く。

「ぐ、はあッ!！」

涙で霞む視界の向こうにアームズ・ドーパントが右腕を剣へと変化させて、スミロドン・ドーパントと共に歩いてくるのが見えた。

『このまま殺しちゃうのは訳ないけどお、ここの門番のせいで生憎虫の居所が悪いのお。だからあ、楽には殺してあげないよお?』

細い刺突剣となったアームズ・ドーパントの右腕が、霊夢の左の太股に突き立てられた。鮮血が、途端に溢れる。

「あ、があああ!！」

獣じみた悲鳴だった。痛みに裏返る声、それでも霊夢は右手に持った札を離さなかった。そしてそれを無我夢中で構え、痛みに塗り潰されそうな霊夢の視界の中で、光が爆発する。

「 霊符“ 夢想封印” !！」

人並外れた霊力を以て繰り出された霊夢の得意技は、至近距離でアームズ・ドーパントを激しく吹き飛ばし、その余波で自らの身体も床を転がり距離を離す。血がどくどくとひっきりなしに溢れてくる。

鋭く、熱を帯びた痛みは霊夢から移動能力を奪うには十分だった。立ち上がることが出来ず床に蹲る。赤い絨毯の上に段々と、血が広がって行く。

『…どいつもこいつも…どいつもこいつもどいつもこいつも…!!』  
『!』

愕然とした。渾身の力で放った、敵を“殺す”為の夢想封印を受けて、尚アームズ・ドーパントは立っている。しかしその身体には確かにダメージはあるようで、激昂した桃花はシールドソードを引きずりながら突っ込んでくる。それに合わせるようにスミロドン・ドーパントも肉薄してきた。

『死ねええええ!!!!』

「ッ…!?!」

「そこまでよ」

その時、横殴りに巨大な植物の蔭が霊夢と二体の間に割り込んできた。と思うと二体は薙ぎ払われて玄関近くまで吹っ飛んで行く。声の方を見ると、扉に寄りかかるように気だるげな体勢の、少女が目に入った。薄桃色のたつぷりとした服装に同色のナイトキャップ。紫色の長い髪をそこから覗かせる少女、先刻まで図書館に居たパチユリー・ノーレッジがそこに立っている。そして、それだけではなかった。いち早く起き上がったスミロドン・ドーパントは素早く霊夢に接近し隙を突く筈だった。それは、いつのまにか目の前に立っていた少女に阻止される。

「ごきげんよう、あなたが私と遊んでくれるの?」

赤と白の可愛らしい衣装、白のナイトキャップから垂れ流れる金糸のような髪を揺らし、主と同じく真つ赤な瞳に楽しげな光を称える彼女は、しっかりと受け止めたスミロドン・ドーパントの右腕ごと宙に放り投げた。

「でも、それにしては」

瞬時に少女の姿が掻き消えた。続いて上空で出し抜けに再び姿を表す。空中で姿勢を制御できないスミロドン・ドーパントを、奇妙な七色の翼を広げて少女は地面に叩き付けた。

「レディーに対する扱いがなっていないんじゃない？」

一瞬の出来事、吸血鬼にしてレミアアの妹である彼女は フランドール・スカーレットは瞬く間にドーパント一体を圧倒していた。

「パチュリー…フラン…」

「いけないわね、霊夢？熱くなりすぎよ」

啞然とする霊夢は息も絶え絶えに二人の少女の名を読んだ。その直後、霊夢の頭上から声が掛かる。降り仰ぐといつの間そこに居たのかレミアアが羽を広げて宙に浮いていた。幼い容姿からは想像もつかない優雅な笑みを浮かべる彼女に霊夢は一瞬思わず見惚れる。

「弾幕がワンパターンになりすぎてるわ、もっと優雅に戦わなきゃ、ねえ？」

「…見てたんなら、手伝ってくれてもバチは当たらないと思うわ」

霊夢は気丈に言葉を返す。レミリアはそれに面白そうに笑って答え、その合間パチュリーが治癒の魔法を掛けていく。

「信仰に響かない？」

「生憎とうちの神社は元々そんなに信仰ないわよ」

みるみる内に傷が塞がった霊夢は立ち上がるうとしてふらつき、レミリアに抱き止められた。失血量が多く、一時的な貧血に陥ってしまったのだ。

「…悪いわね」

「気にしないで」

レミリアは霊夢を抱き上げたまま背中より悪魔のような羽を広げて宙へと舞い上がる。一段高い位置へと運び、その体を降ろす。

「フラン、パチエ。お客様をおもてなししてもらえる？…盛大にね」

「りょーかい、お姉様！」

「おもてなしよりお引き取りしてもらおうわよ。騒がしくて本も読めないもの」

『無視すんなあああああ！！！！』

レミリアの指示にフランは元気良く答え、パチュリーは半眼になって眠たげな低めのトーンで返した。そんな彼女らのどこか戦いと

は離れた世界にいるような少女たちに、アームズ・ドーパントが怒号を上げながら突っ込んでくる。

右腕を剣に変化させ、左手にシールドソードを掲げながら新たに現れた二人の少女に狙いを定め距離を詰める。まずは、金髪の少女。その、華奢な体躯をねじ斬らんばかりの勢いで振るった剣はしかし、空を切り、勢いをつけすぎたアームズ・ドーパントは鑪を踏んだ。

「はあい」

衝撃を受け、激しく吹き飛んだのはその数瞬後だ。見ればフランはいつの間にか背後に回り込んでいた。そうして蹴るか殴るかされたのだろう、規格外のパワーで身体を宙に投げ出される。そして受け身を取ろうとしたその矢先、眼前に炎がのたうつ蛇のように現れアームズの身体を嘗めた。

『ああああ!?!?』

もんどり打って倒れるアームズ・ドーパントを援護するようにスミロドン・ドーパントが疾駆する。前衛をフランと見定めたのか走りながら低空でジャンプ、空中で鋭い回し蹴りを放った。

しかし、紅き少女はそれを右手一つで受け止めた。常人には到底捉えられない蹴りを容易くいなし、フランは相手の腹部に掌打を放ち、壁まで押し戻した。

「美鈴をいじめた分、ちゃんとお返しさせてもらうからね…ツキや！」

更にパチュリーの手に収まる魔導書が迅速に中空へと魔法陣を展開し、そこから大量の水が流れ込んできて二体のドーパントを、その圧倒的な流れの勢いを以て壁に押し付け動きを封じた。忽ち水浸

しになる紅魔館のロビーからフランは慌てて飛び上がる。流水は、吸血鬼にとつての弱点なのだ。

「危ないってば、パチュリーっ!」

「あら、ごめんなさい」

涙目でその声を張り上げるフランにもパチュリーは涼しい顔と声で答えた。そんなやりとりを流しつつ、魔法陣からひっきりなしに流れ込む大量の水を指差し、抱えられたままの霊夢はレミリアに問う。

「あれ、良いの?」

「うちの床は水捌けがいいから。それに掃除するのは咲夜だし」

レミリアは何でもないと返すとそのまま壁へ、霊夢を凭れさせた。そうして軽く身体を解すように動かし、小さな背中に不釣り合いな羽を広げた。

「少し休んでいなさい」

凄まじい流水の怒濤が終わると同時に前衛で立つフランの隣へレミリアは降り立つ。その姿は愛らしい姉妹だが、尋常ではないプレッシャーに桃花は思わず後ずさった。

『妖怪風情が…馬鹿にしてえッ!』

猛突進。彼女らが単なる妖怪であれば、ぶつかっただけで骨まで碎けるであろう一撃はしかし、霞のように姿を消した二人の少女を

捉えきれなかった。どこに消えたのか、何の事はない、アームズ・ドーパントの視線の高さへ跳んだのだ。少女の首を跳ねようと、下向きに視線を集中させていた桃花は、結果的に視界を戻した途端鏡合わせのような息の合った拳を顔面に受け、大きく仰け反った。

「お姉さま！」

「ええ」

着地、羽を畳み背中合わせになった姉妹は蹴りを繰り返して、左右から膝を蹴り剣を振り上げたアームズ・ドーパントのバランスを崩した。更に半身を回転、その動きで素早く背中を使い爆発的な瞬発で体当たりを放つ。鉄山てつざん靠、美鈴仕込みの一撃を受け、大剣を空振り、代わりにアームズ・ドーパントは吹き飛ばされた。

「妖怪風情とは…嘗められたものね」

レミリアが静かに前へと歩み出る。その双眸に宿る紅い光に桃花は狂おしく輝く月を幻視した。妖怪すらもろともしない超常の力を得た筈の体が、恐怖に震える。

『あく、ま…』

「見くびるな、外なる者よ。我が名は吸血鬼レミリア・スカーレット、誇り高き“スカーレット・デビル紅い悪魔”の力、魂まで刻め！！」

レミリアの右手に、赤い光が集まって行く。それは徐々に形を成し、槍の形を取っていく。ふわり、と浮かび上がり、上空から見下ろすその姿は正しく吸血鬼の王女と呼ぶに相応しく、アームズ・ドーパントはまるで彼女に喰われる生け贄のごとくその場を動けない。

「神槍“スピア・ザ・グングニル”!!!」

紅の槍は、主の手から解き放たれ稲妻の如く、そのままアームズ・ドーパントの頭上に落下し、その体を灼いた。続いて爆発を起こし、噴煙が晴れるとその姿は蓄積されたダメージから桃花の姿へと戻っていき、首のガイドライバーからアームズメモリが排出された。

「ころ、してやるう…！いけえ！」

服の所々が焼け焦げ、そして顔を怒りに歪ませながら桃花はスミロドン・ドーパントに命じた。獣の力を駆使し、霊夢へと一気に距離を詰める。

「レミイ、妹様も！戻って！」

最初に気づいたのは離れて戦っていたパチュリーだった。止めを刺そうとしていたレミリアとフランが思わず振り返り、注意が一気にスミロドン・ドーパントに集まったところで、桃花は開け放たれたままの扉から覚束無い足取りながら弾かれたように逃げていく。しかし、それに構っている暇は誰にもない。

「っあいつー！」

レミリアが忌々しげに踵を返すのと同時に、フランも慌てて旋回し追隨する。足止めにパチュリーが弾幕を放つが、それらは悉く躲かれてしまう。跳躍と共に霊夢を引き裂こうとスミロドン・ドーパントは爪を振りかぶる。

JOKER！



「うおらあ！」

突如、玄関のドアがぶち破られた。そして跨がっていたハードボイルダーから跳躍した翔太郎は凶悪な爪が霊夢に届く瞬間、仮面ライダーへと変身し横合いから、すんでのところで回り込んだレミリアとフランが正面から殴り飛ばした。三人分のパンチを受けたスミロドン・ドーパントはロビー中央に落下する。そのまま霊夢の目の前に着地した仮面ライダーは盛大に溜め息を吐いた。

「ギリギリだな…おい、大丈夫か？」

「え、ええ…」

完全に呆気にとられた周囲の妖怪を尻目に霊夢は目を丸くさせながら眼前に突如現れた黒い怪人に頷くしかなかった。それを見て頷くと仮面ライダーはジョーカーメモリを引き抜き、腰のマキシマムスロットに装填した。

JOKER! MAXIMUM - DRIVE!

「さつさと決めるか…ライダーパンチ」

吹き抜けの足場から飛び降りた仮面ライダーは右手に紫のエネルギーを燃え上がらせながら上空から狙い済ましたパンチをスミロドン・ドーパントに浴びせた。

「はあぁッ！」

必殺のライダーパンチがヒットし、スミロドン・ドーパントは断

末魔を上げながら爆散した。爆心に異形の姿は無く、ぐらりとくずおれた男が腕からガイアメモリを排出したのを見て、翔太郎は変身を解除した。遅れて魔理沙が入ってくる。

「ちえ、今回は見せ場なしか」

「わあ、魔理沙だあ！」

吸血鬼の妹は魔理沙を見るなりはしゃいだように飛び跳ね、駆け寄る。そんなフランをあしらいながら魔理沙はレミアアとパチュリに声を掛けた。

「おいおいお前ら、あんまり翔太郎を睨むなよ、そいつは敵意なんて無いんだぜ？」

「生憎と、怪人に変身する人間なんておいそれと信用できるようには出来ていないのよ」

中でも取り分け警戒しているのはパチュリーだ。魔力の高まりが、すぐにでも攻撃できる段階へと移行したことは魔理沙にはありありと肌で感じられた。

「…パチュリー、彼は敵じゃないわ。少なくとも私を助けてくれたんだし」

「なるほど、巫女の勘というわけね」

霊夢の一言に場に張り詰めた空気が緩和された。そこで、翔太郎が自慢のソフト帽の鍔に人差し指をなぞらせながら気障っぽい流し目で語り出す。

「驚かせて悪いな、俺は左翔太郎…探偵だ。お嬢さん方、何か困ったことがあるば、この俺が『ハードボイルドに』解決するぜ…」

決まった、といわんばかりに余韻に浸る翔太郎。魔理沙はあからさまな溜め息を吐き、フランは分かっているのかにこにこ笑顔で魔理沙に戯れついており、パチュリーは毒気を抜かれたような呆れ顔になり、レミリアはじと目で非常に微妙そうな面持ちの霊夢を見やった。

「巫女の勘、ねえ…」

「……な、何よ。敵じゃないってのは、当たったわよ」

「咲夜さん、何でしょうこの空気」

「…わあ」

美鈴に肩を貸しながら歩いてきた咲夜も、ぽかんとした美鈴の眩きにも生返事で、殺伐とした空気はどこへやらといわんばかりの雰囲気且つ綺麗に掃除したばかりの赤い絨毯が何故か水浸しになっているのを見て内心頭を抱えた。しかしながら敵を退けたことには変わり無く。かくて、紅魔館を襲ったドーパント騒ぎは、一応の解決を見たのだった。

#13 気高きV/亡き王女の為のセプテット（後書き）

次回・東方黒切札

「そんな芸当が出来るのは幻想郷でただ一人…紫しかない」

「お初にお目に掛かります、早速ですが取材にご協力お願いします  
！」

「なあに、飛んでいけばすぐだから」

これで決まりだ…！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8902t/>

---

東方黒切札 ~ the Object built-in Gaia's memory.

2011年10月13日14時50分発行